少年の異世界戦記～とある魔術の禁書目録と科学と超電磁砲編～

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記～とある魔術の禁書目録と科学と超電磁砲編～

【Ｎコード】

Ｎ３４１２Ｘ

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

時の神域で暇を持て余していた戒は暇を潰す為にとある世界へと転生と言う形で降り立つ。科学と魔術そして神秘が交錯する時物語の幕が上がる。

転生…とある人の義兄となる！？

ーーー時の神域ーーー

『暇だな…。』

「何が暇なんですか？」

『唯依か…、いや、こうも暇だと暇過ぎて死にそうでな？何処か面白みのある事は無いかなってな？』

とある空間で戒が寝台に寝そべっていると唯依とリィンフォース・アインが部屋に入ってくる。

「主よ、それならばこの世界なんかはどうだ？」

『アイン、それは？』

戒がそう聞くと片手に何か魔導書の様な物を抱えていたアインはそれを戒に手渡した。

「隠居したクロノスから「戒が暇を持て余しているなら」と渡された物だが…。」

『見せてくれるか？なになに……とあるシリーズ……確かに暇潰しにはちょうど良いかもな？』

「主、行くのですか？なら誰か連れて行ってはどうだ？」

「アイン、それでは戒が暇を潰しに行く意味がありませんよ？様々な世界を渡っているのだから偶にはゆっくりとして貰いたいですから…。」

「確かに主にはゆっくりと休養を取って貰いたいが……悪い虫がつかないか心配なのだ。」

「戒の魅力に惹かれてしまうのはしょうがないとしか言えませんよ。私達でさえそうだったのですからね？」

「確かにそれはそうだが……」

「それに増えたとしても既にこの神域には神としては異例の１００人越えの妻を持っている戒なのですからね？」

『それを言われると申し訳が立たないな…。』

「とりあえずはこの世界に行くと言う事ですか？」

『……そうだな。能力の制限は神力と神技に妖力位で良いかな？後は向こうに行く時に制限（リミット）を加えれば問題無いし何かトラブルがあれば解放（リリース）すれば対処が出来るからな？』

「世界を渡る上での向こうの設定はどうなさいますか？」

『鬱な感じかな？異常な能力を持つ余りに両親に捨てられた子供って所か？』

「それは実際の話で？」

『まぁ、唯依達と逢う以前になるが…な？取り敢えずその設定で頼む。何かあれば喚ぶ事にもなると思うがそうそうにあっては堪らないがな？』

「確かに、主の行く先々では何時も災難（トラブル）に遭われていますからね…。」

『否定出来ないなυ常に波乱万丈な事になっていたからな…。』

隠しスキルの恋愛原子核に災難探索者（トラブルサーチャー）を持っている事に気付いていない様子の戒はそのまま唯依とアインに告げる。

『俺はこのまま向こうの世界に渡る…他の皆に宜しくと伝えてくれ。』

「了解した、我が主。」

「わかりました。」

『それじゃあ、また。』

そして2人を残して戒は光に包まれて時の神域から姿を消した。

―――とある郊外―――

『此処か…。それにしても渡る度にこう体格が変化するのには慣れないな…。さて、今の俺の状態は……』

―――黒逸　戒翔（かいと）のステータス―――

年齢５歳

種族　響界種（アラザイド）……複数の種族が混在する為

体力Ｃ－

腕力Ｂ＋

知力ＥＸ

俊敏Ａ－

耐久力Ｂ－

魔力Ｂ－

氣Ａ＋

幸運ＥＸ

所持品

デバイス　8、アル、バハムートの三機、魔法発動媒体の指輪、
使用可能能力（スキル）
魔法、ただし変装魔法は使用不可、創造、ＥＳＰ、今迄に開発した機体の能力（システム）、完成（ジ・エンド）、魔眼、宝具及び真名解放、荒神化及び部分解放、魔術、黄金律、ＮＴ能力
使用不可能力（スキル）
神力及びそれに関する技能、妖力、神霊召喚、龍の系譜、魔獣の能（ス）力（キル）、魔方具（アーティファクト）
超能力
空間支配（エリアマスター）、物質破壊（マテリアルバスター）

『7歳……まさかの小学生か？にしても小学生にしては能力値が高いが……俺のこの世界での親はこの体の持ち主の異能を不気味がり捨て……俺が憑依した訳か。名前が変わったが名字は変わって無いな？』

戒がそんな事を考えていると茶髪で髪をセミロングにした1人の女性が近づいて来る。

「僕、どうしたのこんな所で？」

『（この女性には悪いけど今の状態を説明すべきか…。）僕は親に

捨てられたみたい…。』

「え……」

『迎えに来るから此処にいてと言われてもう3日は過ぎてるし、そう思うしかないよ。（子供の口調だと話し辛いなぅ）』

「…なら私の家に来ると良いわ！貴方より2つ下の娘がいるけどきっと貴方も娘も仲良くなれると思うわよ♪」

『そうは言っても……』

「子供は大人の言う事はなるべく聞いた方が良いと思うわよ？仮に断ったとしても生き抜く為の衣食住はどうするつもり？何よりも子供だけで歩き回れば補導だってされるわよ？」

『……（正論だが仮にこの女性の家に転がり込んで良いものなのか？そもそも娘の方が不信感を露わにしないのか？母親が知らぬ子供を連れ込んだりして……）確かにお姉さんの言う事は正しいけど僕みたいな見ず知らずの子供を普通は「一緒に来ないか？」なんて聞かないよ？他の人は見て見ぬ振りして素通りするか同情や好奇の眼でみるかしてるだけだから……』

「そんな事は気にしないわよ？第一、君みたいな子供を見捨てる様なら私は母親失格…それ以前に人として失格よ。」

『まだ、貴女の子供になるって……』

「サッサと行くわよ？」

『はっ？えっ！？ちょっ……』

両者が正論を述べる中、女性は戒翔の手を取るとサッサと歩き出してしまう。戒翔は足取りを危ぶみながらもなんとか手を引く女性に着いて行くと何処にでもある様な普通の一軒家に辿り着いた。

「さっ、此処が今日から貴方の家よ。」

『その前に僕はお姉さんの名前すら知らないんだけど……』

「そう言えば自己紹介がまだだったわね…。私の名前は御坂美鈴、娘の名前は美琴よ。」

『（未来の…超電磁砲（レールガン）の母親？！…どうりで…誰かに似ている訳だな…。俺もとんでもない人に拾われたものだな…。確実に上条夫妻には拾われたくはなかったがまさかの御坂の母親とは……）僕の名前は黒逸戒翔（くろいつかいと）です。』

「養子になるから戒翔の名字は御坂になるから御坂戒翔…ね♪」

『養子？』

「勿論、養子になっても娘とは結婚出来るわよ？」

『子供に何を言うんですかυ親がしかも母親がそう言った発言はしちゃダメでしょυ世間的にしても……』

「あら♪将来的になったとしても私は賛成だから安心してよね？」

『（駄目だ、この人なんとかしないと…）早く行きましょう。僕の義妹（いもうと）にも会いたいですから……母さん／／／／／／／／』

「ふふふ♪そうね？美琴もビックリするわね？こんなに格好いいお義兄ちゃんが出来たのだからね？」

そして、家に上がり、リビングに入ると先ず目に入ったのは赤ん坊の寝るベビーベッドであった。

「アゥ～～♪」

『（なんだこの可愛い生物（いきもの）は！？）この子が美琴？』

「そうよ。御坂美琴、戒翔の義妹よ？美琴～？貴女に素敵なお義兄ちゃんが出来たわよ～？ほら、戒翔も美琴に挨拶して上げて？」

『は、はい。み、美琴～？お義兄ちゃんの戒翔だよ～？』

「あっ♪あっ♪」

「ふふふ、喜んでいるわね？」

『赤ん坊って可愛いですね…。無邪気で純真無垢で……（なんの汚れも知らないこの顔を悲しみに染めたくはないな……）』

この時、未来で呼ばれる常盤台の超電磁砲と最狂の無能力者（レベ

ル０）が会合を果たし、更には義兄弟になったのであった。

『さて…と、進学する高校の入学手続きと入金を済ませないと……ってなんだ？銀行のシャッターが閉まってる？原作には……あったな。白井が風紀委員（ジャッジメント）として固法美偉に同行して初めて体験した事件で美琴が介入して解決した事件でもあったな。』

戒翔はそこで一つ息を吐き徐に手の中から何かを取り出した。

『だが、我が義妹（いもうと）が来るまで時間があるし何よりも早く片付けて入金と入学手続きを済ませたいからな…。』

そう言った戒翔はその場から誰にも気付かれ無い様に阻害用の魔法が施されたグラサンを掛けて気付かれ無い様にして忽然と姿を消した。

―――黒子ｓｉｄｅ―――

「ははははッ！俺の能力は絶対等速（イコールスピード）コイツは目標が壊れるか俺が止めるまでどんな障害物があったとしても突き進んで行くんだよ！」

「（私（わたくし）とした事が迂闊過ぎですわね…。確かに能力は高くとも相手の出方を考えるべきでしたわ。）くっ！」

銀行の中では受け付けの前でこの事件の犯人と思しき男と足を怪我した茶髪でツインテールにした少女が対峙していた。

「それにしても、お前みたいな奴が空間移動（テレポーター）能力者だとはな。どうだ？俺の仲間に入らないか？お前の能力と俺の能力が合わされば恐いモノなんて無いぜ？」

「はっ！お断りですわ！貴方の様な方なんて此方から願い下げですわね！」

「ほんとに生け好かねぇ餓鬼だな！その足でこの数の鉄球を避けられるかな！」

少女はそう言い放ち、男はその言葉に最早無事では済まさないとばかりに少女を標的として十数個の鉄球をバラ撒いた。

「くっ…！」

拙いですわね！痛みで能力が安定しませんし、此処までですの！？私の浅慮の所為で固法先輩に怪我をさせ、迷惑まで掛けてこれで終わりですの！？

少女が半ば諦め掛けたその時……

『こっちは急いでいるのだから大人しく捕まってくれ無いかな？』

その瞬間、少女に向かっていた鉄球の全てが勢いを削がれ、ソレ等は重力に従って音を立てて落ちる。

「なっ！？何なんだよ！テメェは！？」

『全く、非番の日だと言うのに面倒臭い…。固法さんは怪我してるが…其処の少女、コイツがやったと見ても良いのかな？』

「え、えぇ。間違い有りませんわ。」

「俺を無視して話してんじゃねえよ！」

戒翔が少女に状況の確認をしていると男はそれを無視されていると結論付けたのか激昂して上着に忍ばせていた無数の鉄球を戒翔に目掛けて投げる。

「いけませんわ！アレを受け止めては…『無駄な事を……』えっ！？」

投げられた鉄球を見て少女は戒翔に注意を呼び掛けるがそれを関係無いとばかりに戒翔は鉄球の方へと歩き出し、鉄球が戒翔の近くで前触れも無く先程と同じ様にして落ちる。

「なっ！一体何なんだよ！お前は！」

男はポケットに忍ばせていた拳銃を引き抜くと戒翔へと向けるがその場には戒翔は既にいなかった。

「！？…何処に…『王手（チェックメイト）だ。』がはっ！」

男が辺りを見回している時、真上に現れた戒翔の踵落としにより男は地に伏せて意識を手放した。

一体何者なんですのあの殿方は……

―――黒子ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―――

―――戒翔ｓｉｄｅ―――

『ったく、おい！其処の！』

「……何ですの？」

『……見せろ』

「はっ？」

『あぁ、言葉が足りなかったな…。傷を見せろって意味だ。足と腕をヤっただろ？』

「私は怪我など…痛ッ！？」

少女が痩せ我慢をしている物だからついつい傷口を突っついてしまったが痛がっている所を見ればかなり酷い様だな…。

『やっぱり怪我をしているじゃねぇか。』

「かっ、確認の為とは言え、れっ、レディに手荒な事は感心しませんわね…？」

『そっちが隠すからだろっと、これで大丈夫だな…？痛みはもう無

い筈だが…。』

「そんな簡単に痛みが…無い？どう言う事ですの？」

見事に鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をしているな…。

『質問なら美偉さんを起こしてからで良いだろ？』

「貴方……固法先輩と知り合いですの？」

『知り合いと言えば知り合いかな？同じ風紀委員だしな？』

「…貴方は風紀委員でしたの？」

『おいおい、俺の話を聞いていなかったのか？非番の日と言ったのだから学生で非番って言ったら風紀委員位しか思い付かないだろ？美偉さんの背中の傷も治療完了だな……』

「ソレはないですわ！っと言うか先程から気になったのですがソレは貴方の能力ですの？」

『それは…「このぉー！」ん？』

戒翔が少女の言葉に答えようとした時、少女が昏倒させたと思われる男が突如起き上がって来て鉄の棒を戒翔へと振り下ろしてくる。

「危な…『心配ないよ。』えっ？」

少女が咄嗟的に前に出ようとするが戒翔により遮られ、少女が戸惑

いを声に出した途端、男は横から走って来た電撃に声にならない絶叫を上げて2人の目の前で気絶して力なく倒れ伏す。少女は電撃が飛んできた方を向くと戒翔が倒した男が開けた穴から此方に手を伸ばした状態で立つ少女がいた。

「兄貴、何してるのよ？」

『仕事？』

「なんで疑問系なのよ」

『非番だからだろ？非番の日に仕事してるかって聞かれたら疑問系使ってもどうだって良いだろ？』

「まっ、兄貴が自分から頭を突っ込むのは稀だしね。」

『だろ？さて、迎えも来たし事後処理は君達に任せるわ。』

「はい？せめて事情を『面倒だからパス…。』ちょっ！お待ちなさいな！」

俺は少女の制止も聞かずにサッサと歩いて、あの男がシャッターに開けた穴から身を乗り出して先程の茶髪の少女……我が最愛の義妹にして常盤台のエース…御坂美琴と合流して直ぐに雑踏の中へと逃げる。まっ、後で呼び出しを食らうかも知れないけどな…。

―――戒翔side　out―――

戒翔はこの時に名も知らぬその少女から慕われる様になるがそれと同時に大変な目に遭う事を知るのにはそう遠くないだろう……。

中学最期に逢う災難（トラブル）……余計なフラグは自身を滅ぼす！←なんの宣

「他の作者様が書いて居たのを見てアイディアが出て来たので異世界戦記シリーズの主人公で書いてしまいました♪」

『少しは自重しろ！Ｍｕｖ－Ｌｕｖにゼロ魔それにリリなのすら書いている上に自身の首を絞めてどうするんだ！？しかもまさかの兄弟ネタとか超電磁砲ファンに殺されるぞ？！』

「ま、実際には科学ｓｉｄｅと魔術ｓｉｄｅの両者を交えた話にして事件が起きる度に主人公が奔走して行くみたいな話かな？主人公は風紀委員をその高い能力を買われて小学3年からと言う異例中の異例として採用されたと言う追加設定があったりするんだな…。」

『面倒事は嫌いだと言うのに自ら進んで行くとかｕ』

「主人公の宿命だな（笑）」

『そうした元凶が何を言うか！』

「これでも今回は微ハーレムにして行く積もりだから大丈夫だとは思うよ～？読者様達からの絡みの要望などが無ければの話だけどね…？」

『ゑｕ』

「まっ、楽しみにしていてくれよ。主人公弄りは作者の特権ってね（笑）」

『そんな権限は無いわ！！！！』

「さて、戒翔弄りも此処等辺りで締めさせて戴きます。次回は時間を飛ばして夏休み前の原作開始の場面まで飛ばさして貰います。」

『入学やその後の話は書かないのか？』

「原作開始までは糞詰まらない学生生活ばかりだから詰まらない話は基本的に書かない主義だからね？」

『詰まる所面倒臭いと？』

「ざっくりと言えばね？」

『まぁ、目の当てようの無い悲惨な結果にならない様に頑張れよ。』

「当たり前だのクラッカー♪」

『……ネタが古いぞ υ』

「それではまた次回で会いましょう♪」

『会いたく無いのも居たりしてな……』

7月16日

―――第7学区交差点―――

『今日のこの後の予定は特にやる事も無いし第15学区に行って飯でも喰うか…。当麻はどうする？俺の奢りだから金はあまり気にするなよ？』

戒翔は今、自身の通う高校から帰宅する最中で寮に住む隣人で自ら不幸と豪語する可哀相な友人、白のカッターシャツに黒い制服ズボンを着た上条当麻と帰宅する為に共に歩いていた。

「ほんとか！？俺みたいな無能力者（レベル0）は今の生活でさえギリギリだからたすかるぜ ｕ」

『確かにな…無能力者と言うだけでランクが上がれば貰える額が増えるからその分暮らしに余裕が持てるからな…。まっ、お前のその右手はアレすぎて解析不能だから仕方ないとしか言えないな。』

「……不幸だ。」

『そんな所で打ち拉がれて無いでサッサと行くぞ？』

「おぅ…。」

その後は比較的に問題無く目的地へとたどり着いた。

―――ファミレス内―――

『さて、何を喰うかな…。無難に日替わりにするか？いや、こっちのステーキセットにするかな…？当麻は何にする？』

「俺は『遠慮はすんなよ？』…じゃあこのステーキセットにするわ。」

そして注文が決まり、待っていると……

「おぉおぉぉお姉様ぁあぁぁあぁぁっ！！！」

丁度俺からみて真向かいの席からそんな絶叫ともとれる声が聞こえ、それを聞いた当麻は肩をビクッとさせて何事かと後ろを振り向くといつかの茶髪のツインテールの少女が我が義妹に抱き付いていたのである。

「お姉様が黒子の事をそんなにも黒子の事を想ってくださったなんて！黒子はもう！もう！どうにかなってしまいそうですわ！」

少女…黒子と自身で叫ぶ少女と義妹はまだ此方に気付いていない様子で更に黒子はヒートアップしていく。それに堪えかねたのか義妹は黒子に「好い加減にしろぉっ！」という言葉と同時に脳天へと拳を振り下ろし、黒子を沈める。我が義妹ながら恐ろしい腕を持った物だな…。

「何なんだ？アレυ」

『気にしないでサッサと食って帰るぞ。関わると碌でもない目にしか会わないからな…。』

「お、おぅ。」

そして俺達の注文した物が来て食べていると……

「アレ？あっ、兄貴？どうして此処に居んの？」

『友達と一緒に飯喰いに来ただけだな…？それとその子は大丈夫なのか？』

「その子？……あぁ、黒子の事？何時もの事だから直ぐに「おぉぉぉお姉様ぁぁぁぁぁぁ！？」ほらねυ」

『アレを喰らってからの復帰がやたらと早いなυ』

「あら？お兄様ではないですの？それで此方の殿方は？」

「俺は上条当麻ってんだ。」

「そうですの…私はお姉様とお兄様を慕って『ちょっと待てυ』何ですの？」

『その「お兄様」ってなんだ？俺は白井に兄と呼ばれる様な間柄では無いと認識しているがυ』

「そんな事ですの？お姉様のお兄様でしたらお姉様をお慕いしている黒子もと　（あの時に黒子はお兄様の事もお慕いしている事は内緒ですわね…。）」

戒翔が黒子に問うが黒子はさも当然の様に答える。内心ではあの事件の時の戒翔の姿を見た瞬間(とき)から黒子は戒翔に魅入っていたのである…。本人には絶対に内緒であるが……

「兄貴のコレは晩飯？」

『まぁ、そんな所かな？寮に帰ってもやる事と言えば予習復習にもうすぐ夏休みだからその予定の確認位だな？』

「ならさ？偶にはさ、わたしと勝負しない？勿論、被害が出ない広い所でさ？」

『風紀委員としては止めるべきだが…義妹のお願いを無碍にする程俺は薄情ではないからな…。当麻はどうする？見学して行くか？無能力者の戦い方と言うのを見てみたくは無いか？』

「あ～っと、はい！見させて頂きますですυ　（こっちを見る時に威圧感バリバリで目が笑って無い状態でどう断れと！？）」

「わたくしもお姉様とお兄様の戦いと言う物を見てみたいですわね？」

『此処からだと河川敷が近いかな？１５学区の外れに行くぞ…。美

琴、美琴達の伝票を渡しな。』

「なんでよ？」

『良いから…。』

「あっ、ちょっと！」

そう言うと戒翔は美琴の手から伝票を取ると自分達の伝票を持って会計に行ってしまった。

「お兄様は出来る殿方と言う感じですわね？　（さり気ない振る舞いでさえこの黒子！狂ってしまいそうですわーー！）」

「まぁ、わたしも兄貴には今も頭が上がらないし、反論のしようが無いわね…。　（黒子の奴…まさか兄貴の事を……って私は何を考えてるのよ／／／／／／／／／／）」

「あの～？お二方？戒翔が待ってるんじゃ？」

「わっ、わかってるわよ！？黒子行くわよ！」

「あっ！お待ち下さいな！お姉様ぁ！」

「って、俺を置いていくなーー！」

ーーー学園都市第１５学区　河川敷ーーー

「はぁ、はぁ…、速すぎだってυ」

「男の方の癖に軟弱ですわね？」

「それよりも２人は？」

「彼処ですわよ？」

戒翔と美琴は黒子と当麻が見守る中で相対していた。両者の距離は約１０メートルと言った所である。

『此処なら邪魔も入らないし被害は出ないかな…。そっちの準備は良いか？』

「いつでもイケるわよ？」

『なら…行くぞ！』

そう叫び先手必勝とばかりに戒翔は駆けて１０メートルはあった距離を一息で抜けて戒翔は御坂へと中段蹴りを放つが美琴はそれをバックステップで回避すると先程まで自身がいた場所へと自らの超能力の電撃を放つ。

『まぁ、今のは避けれて当然だな…。』

「兄貴も普通に避けたわね？普通電気の速さを避ける事なんて出来ないわよ？」

『そこは俺だからな？』

「なら…コレはどうかしら！」

言葉を交わしながら戒翔は御坂の放つ電撃を走り距離を詰めるべく回避しながら駆け抜ける。そこに御坂は先程までとは比べ物にもならない電撃…雷撃を戒翔へと放った。雷撃が地面に直撃して爆音と砂塵が舞い戒翔の姿が砂塵の中へと消える。

『流石に今のはヒヤッとしたかな…？』

「兄貴はやっぱり規格外よｕアレを使ってない状態で超能力者（レベル５）のわたしの攻撃を避けるし、気を抜けばいきなり懐に入るしねｕ偶に兄貴が人間かどうか疑うもん。」

砂塵の中から戒翔はゆっくりと抜けて美琴にそう感想を述べるが御坂はやや呆れととれる言葉を吐く。

『それは医学の方で人間に分類（カテゴライズ）されているぞ？それよりも美琴…わざと外したな？』

「だって兄貴本気を出してないじゃん。」

『俺が本気出して良いのかな…？』

「だって今まで兄貴が本気を出した所って見た事無いし……見てみたいからわざと外したんだもん。」

そう言いながら美琴はそっぽを向いて頬を膨らましていた。

『膨れっ面をするなよυ（ああいった拗ねる仕草は昔から変わらないな…（笑））』

「……だって、本気の兄貴に勝ちたいから……（本気の兄貴に勝たないと意味がないじゃん！）」

『それはまた今度な…？』

「なんでよ？」

『あのなぁυこれだけ派手にやれば警備員（アンチスキル）が出張ってくるだろ？』

戒翔の言葉と同時に遠くからサイレンの音が聞こえる。

『ほら、お前達も門限があるんだからサッサと面倒事になる前に退散しろよ？』

戒翔はそう言うと踵を返してサイレンのなる方とは別の方向へと駆けだした。

「お姉様……」

「今度は絶対に！兄貴に本気を出さしてやるんだからねーー！」

『楽しみにしてるよーー！』

美琴は既に遥か先にいる自身の義兄に声を張り上げると遠くにいる

戒翔も答える。

「黒子、帰るわよ。」

「わかりましたわ。」

そして、美琴は黒子の空間移動（テレポート）でその場を後にした。

7月16日（後書き）

「さて……我等が主人公はいないな？」

『甘いわ！この駄作者が！！！』

「ぐばらぁっ！！！」

『美琴と黒子の性格がかなり違うだろ！？…って言うより美琴のキャラが違うだろ！全国の超電磁砲ファンに謝れ！』

「グフッ！反省はしているが後悔はしていない！」

『……シネ』

「ちょっ？その手に持った鈍器ｈ」

ーーー暫くお待ち下さいーーー

『ったく、所で最後のアレの後に当麻が出なかったがどうなっているんだ？』

「そ…れは後書きの後のオマケで……ガク」

『……作者が気絶したのでこの辺りで…、次回も楽しみにしていて下さい。』

ーーーオマケーーー

「そこの学生！待ちなさい！」

「待てと言われて待つ奴がいるかー！」

戒翔達が退散した後に逃げ遅れた当麻は今、警備員（アンチスキル）に事情聴取を取られるべく追い掛けられていた…。

「クッソー！戒翔の奴はサッサと行っちまうし御坂は白井と退散して俺だけ追い掛けられるとか！不幸だーーーー！！！！！」

夜の街の中に当麻の空しい叫びが夜空に響くのであった。

『あっ、当麻の事忘れてたな…ｕまっ、当麻なら大丈夫だろ？今は眠いし寝るか……』

寮に戻ってからソレに気付いた戒翔は親友の心配よりも自身の睡眠欲を優先するのであった……

7月18日　連続虚空爆破（グラビトン）事件

―――風紀委員本部―――

この場には各支部の風紀委員が集まり177支部の固法美偉が説明をしていた。

「今日未明に起きた爆破事件はアルミを起点とした物で重力子の量では無く速度を変化させ、周囲にそれを拡散させ所謂〈アルミ爆弾〉として使用された物です。」

そして固法は画面に学園都市の地図を表示し、それに次々に撃墜（キル）マークの様な物が追加される。

「数日前より相次ぐこの事件は無差別に行われ、近隣の被害等も建造物への被害の他に、既に知っての事だと思いますがその場に居合わせた風紀委員が負傷しています。」

そして会議室の場が明るくなる。

「重力子を使った爆破事件の為、この件を連続虚空爆破事件として各支部の風紀委員達であたります。不審な物が無いか注意してあたってください。」

―――喫茶店内―――

「……って言うのよ！？アンタはあたしの母親かぁあぁあぁぁ！！！！」

『美琴の趣味は昔から知ってるが黒子はお前にはもう少し先輩としてちゃんとして欲しいから言ったんじゃ無いのかな…？言い方としては良くないけど……』

「それでも黒子はあたしの趣味の他にも色々と口を挟むのよ！！！そこの所どう思うのよ？初春さんはどう思うか聞かせてくれないかしら？」

「は、はぁ……と、取り敢えず落ち着いて座りませんか？」

「……へ？」

いきり立ち俺に同室の黒子の愚痴を叫びながら初春に問うが初春は苦笑を交えた表情で美琴に言うと美琴は間抜けな声を上げて周囲に顔を向けると先程の叫び声と立ち上がった事により周りの客から注目されている事に気付く。

『あれだけ叫べばそうなるだろ？』

「あは、あはははーー／／／／／／／／」

俺の言葉が静かな店内に消え、顔を真っ赤にさせた美琴は笑い声を上げて静かに座った。

「多分ですけど白井さんは御坂さんに危険な目にあって欲しく無いんじゃないんですか？」
「そこがわからないのよね。あたしは超能力者（レベル５）で黒子は大能力者（レベル４）なのにね…？」
『そう言う問題じゃないだろ？美琴は基本的には一般人で黒子や初春に俺は風紀委員……所謂治安維持の為の仕事をしているのだからな？』
「それはそうだけど……」
『先輩として…そして尊敬するお前に怪我をして欲しくないから敢えて突き放す言い方をしているんだぞ？』
「アイツがそんな事を考えている訳ないわよ。」
「でもここの所はほんとに物騒なんですよ？」
俺が美琴を諌めるが美琴はそれを斬って捨てるが初春がタイミングよく話を切り替える。
「虚空爆破（グラビトン）事件って知ってますか？」
「あ～、ニュースで見たかも……」
初春の言葉に美琴は思い出すかの様に呟いた。
「爆破する場所や時間に法則性が無くて未だに犯人の特定が出来ないんです。」

『で、最近になって爆弾をぬいぐるみや子供が持つ様な鞄等と言った警戒心を削ぐ物に仕込む様になってきたな……』

「それは…エゲツないわね……」

『やり方がエゲツない以前の問題で根性が腐りきった奴なのは確実だ。狙いがわからないが年端もない子供の玩具や持ち物に爆弾を仕掛けるのだからな……』

初春の言葉に美琴はそう漏らし、それに対して俺は怒りを静かに表して言葉を吐く。

「それの所為で風紀委員の方も何人も怪我人を……」

初春が俯きながらそう語り出すが……

「お待たせしました。こちら、ジャンボフルーツパフェになります。」

「わぁー！きたきた！来ましたよー！！」

喜色満面な表情でパフェを見つめる。初春よ、お前は同僚の心配よりもパフェが大事なのかυ

「いっただっきまー……」

「う～い～は～るぅ～？」

それを嬉しそうな表情でパフェに手を出そうとした初春に地獄の底から出て来た様な声がし、そちらを見ると傍らに鬼の様な形相で背後には般若を携え此方を睨む黒子がいた。心なしか彼女の特徴とも

言えるツインテールがウネウネと動いている様である。

「し、白井さん！？」

「ふん！」

黒子の急な登場に初春は驚きの声を上げ、美琴はそっぽを向くと解り易い反応を示した。

「この様な場所で油を売っているとは良い度胸ですわねぇ？パトロールに行きますわよ？」

「ま、待って下さい。パフェ…パフェが…！あ～！パフェがぁ～！」

抵抗虚しく、黒子にドナドナ宜しくな連行をされて初春が滝の様な涙をデフォ付けて引き摺られて行く。どれだけ食いたいんだよυ

「わたしが初春さんに付き合ってもらったのよ。」

「ん？」

美琴が苛立たし気に腕組みをしてそんな言葉を言い放つと、黒子の眉間に皺が出来た。美琴、お前はもう少し感に触る様な言い方を直してくれυ

「文句が有るのならわたしに直接言えば？」

「どう致しまして、これは風紀委員（ジャッジメント）の問題ですので…」

「一般人は口出しに手出し無用って訳？」

「お姉様、お忘れの様ですから再三申し上げますが風紀委員はお姉様が考えているよりも甘くは有りませんのよ？」

「な！？ちょっと！！！！」

公衆の面前の中で終始繰り広げられていた口論に俺が仲裁に入ろうとした所で黒子は初春を尚も引き摺って店内から出た事により事態はあっさりと終息する。

「何よ！偉っそうにして！二言目には風紀委員、風紀委員って！なら一度位わたしが不良を倒す前に来てみろっつーのよ！！！」

『なら美琴もなるか？風紀委員に……』

「絶対に嫌！お断りよ！！！」

俺がそう提案をすると美琴は即座に答え、俺はそれに予想通りの答えが返ってきた事に苦笑をする。まぁ、美琴は縛られたりするのが嫌いってのもあるが、基本的に組織的な所には入りたがらないからな…（苦笑）

「風紀委員に？なるねぇ…（笑）」

『美琴、その顔になるといつも良からぬ事が起きているんだが……』

「なによ！何時もじゃないでしょ！？」

『……ほう？』

美琴の悪どい笑顔に俺が釘を刺すがあろうことかコイツは何時もじゃないとのたまった。幼少期からコイツのこの顔をした後の騒動の後始末を誰がしたのかな　（黒笑）

「な、なによ？（汗）兄貴もなにか文句があるの？」

『ある！昔にお前がその顔をして起こした騒動の数々を忘れたとは言わせないぞ？』

「そ、騒動って（汗）」

『まず一つ目、お前が悪戯と称して武装無能力者集団（スキルアウト）に馬鹿をやって鎮圧するのにどれだけの迷惑を掛けた？』

「Σうっ υ」

『二つ目には探検と称し、学園都市を歩き回り迷子になった挙げ句（ア）警備員（ンチスキル）の厄介になり、俺が迎えに行ったら寝扱けていたり……』

「Σうぅっ υ」

『それに三つ目は「解った！解ったからそれ以上は言わないで！／／／／／／／／」なら、解っているな？』

「解ったわよ！変な事はしないで大人しく『解ってないな…。』なんでよ！？」

「美琴は基本的に一般人だが風紀委員から一般人への協力を要請さ

れたらそれを受託する事が出来る』…え？…それって……」

『俺の手伝いみたいな扱いになるが協力をしてくれないか？』

「良いの？」

『良いも悪いも、俺は協力を頼んでいるだけなんだけど？』

「有難う！兄貴♪」

『だからと言って抱きつくな！／／／／／／』

俺の助け舟とも言える言葉に美琴は歓喜の余りに横から抱き付いてきた。年がそんなに離れている訳では無いのだから軽々しく異性に抱き付くのもどうかと思うぞυ

「良いじゃん、私達は兄弟なんだし／／／／／／」

『照れる位なら止めれば良いだろυ』

まぁ、美琴と黒子が仲悪くしていると此方の調子が狂うから少しは助けてやるとするかな？

『サッサと外に出るぞ？この後は固法から仕事を頼まれているからな…。』

「解ったわ。」

そして、二人で喫茶店を出た後に固法と待ち合わせしている場所に

向かった。

ーーーコンビニ前ーーー

「来てくれて助かるわ。」

『と言っても風紀委員の仕事なら関係ないと思うが……』

俺はそう言いながら眼鏡を掛けたセミロングの女性……固法美偉に話し掛ける。

「それでもよ？って其方の子は？」

『俺の義妹で手伝いをしてくれると言う事で連れて来た…。』

俺は固法の前に美琴を出して此処にいる理由と紹介を兼ねて行った。

「常盤台の超電磁砲（レールガン）の御坂さん？」

「は、はい！あの宜しくお願いします！！」

「ふふ、そんなに緊張しないで良いわよ？楽にしてくれると助かるわ。」

『で、仕事は先ず出始めにこのコンビニ周辺の清掃…か？』

「えぇ、その通りよ。お願い出来るかしら？」

「コンビニ周辺の清掃？」

『任せろ。美琴、これも風紀委員（ジャッジメント）の仕事だからな？』

～～～～～～～

「なんかわたしの思ったのと少し違うかも……」

『美琴は何を想像していたんだ？治安維持とは言っても様々な種類があって、こうやって近辺の清掃をしたりし、落とし物を探す事に無闇に能力を使う者の鎮圧……風紀委員は簡単に言えば何でも屋みたいな事になるのかな？』

あれから俺達３人は各自の分担場所へと向かい箒等を使い掃除をしていた。俺は密かに風を使って枯れ葉や塵屑を片付けていた。そこ！能力の無駄遣いとか言うな！有効活用だからな！

～♪～♪～♪

「兄貴、携帯が鳴ってるよ？」

『あぁ、って土御門かぃ……もしもし？』

《おぉ～かいやん今ひまぜよ？》

『仕事中に電話するな似非土佐弁野郎！』

《酷いにゃ～。かいやんに遊びの話を持って来てやったんだぜ？》

『しるかｕというより貴様はまた俺を餌に軟派がしたいだけだろうが。』

「な、軟派！？」

《ん？かいやん、近くに誰かいるのか？》

土御門が電話で言った言葉に俺が普通に返すが美琴が過剰な反応を示す。何故だ？

「あ、あぁ、義妹が近くにな……」

《いいにゃ～♪リアル妹！しかも義理でツンデレ！って言うのは最早ネ申ぜよ！》

『……テメェの妹の舞夏に報告しておくぞ？』

《そっ、それだけは勘弁ぜよ？軟派は冗談に決まってるにゃ～？》

『用件はそれだけか？』

《……アレイスターがお前に会いたいそえだぜ？》

『……どう言う事だ？』

《俺も良く解らんが言付けを頼まれた。何の思惑があるか解らないが気を付けた方が……》

『それは友達としてか？それとも……魔術側としてか？』

俺は後半の声色を変えて聞く。

《勿論友達としてぜよ。》

『ふっ、なら安心して受け取っておく。時間があれば偶には連むのも良いかもな…。』

《かいやん、男のツンデレは気持ちが悪いぜよ?》

『……コロサレタイカ?』

《肉体再生(オートリバース)の自分には無理があるかにゃ〜?》

『物理的ではなく精神的にヤッテヤロウカ?』

《冗談だよにゃ〜?》

『なら本気(まじ)でやるか?』

《ソイツは遠慮するぜよ?》

『冗談のわからない野郎だな…。』

《冗談キツいぜよ?　(かいやんが言うと冗談に聞こえないにゃ〜。)》

『どうした?』

《な、何もないぜよ!?それじゃ用事があるからにゃ〜。》

『…？変な奴……いや、今に始まった事では無いな…。』

慌てて向こうから切られ、訝しげに携帯電話を見つめ考えたが直ぐにどうでもよくなりポケットに携帯をねじ込み掃除を再開する。美琴は美琴で電話の内容が気になっているのか終始不機嫌でいたが内容が気になるだけであからさまに表情（かお）に出すか？

ーーー公園前ーーー

『今度は捜し物…か。』

「子供用鞄が探し物だから気を付けて探してね？見付けたら報告をお願い出来るかしら？」

「勿論です！」

『（これはまた何か勘違いをしているなぅ）探し物は鞄とはまた大変だな…。』

「それはしょうがないとは思うけど……『落とし主に取っては大事な物だからな…。』その通りね。」

『俺は向こうの正面側から行くから美琴は真ん中からで固法さんは子供達に聞きこみをお願いします。』

「子供達ってアテになるの？」

『この公園は子供達の遊び場…ひいては彼等に取っては庭に近しい物があるから存外に馬鹿には出来ないぞ？』

「兎に角、今は落とし物を探しましょ。」

〜〜〜〜〜

『中々見付からない物だな…。』

「あ、あの…風紀委員のお兄ちゃん。」

『ん？どうしたんだ？』

「あのね？皆でサッカーボールで遊んでたんだけど……」

あれから入り口周りを探し、今は広場の中心近くを隈無く探していた所に少年がどこか申し訳無さそうな表情で話し掛けて来てある方向を見ると木の枝の上に上手くハマったのかサッカーボールが挟まっているのが見えた。

『解った。アレを取れば良いのか？』

「……うん。」

『そう落ち込む事でも無いぞ？偶々あそこに引っ掛けてしまったのだから次からは気を付ければ良いんだからな？』

「うん！」

『さて、少し下がっていろよ？』

「わかった！」

俺の言葉に少年は少し下がり、それを確認した俺は木の幹に前蹴り…所謂ヤクザキックを軽く入れるととてつもない音を上げ、木葉や枯れ葉等が多少舞い落ちてそれと一緒にサッカーボールが落ちて二、三度跳ねて少年の下へと戻って行った。

「お兄ちゃんスゲー！！」

『そうか？まぁ、今度から気を付けろよ？』

「うん、有難う！」

俺が少年の相手を終えた瞬間……

「いたぁー！！！」

固法が草村から身を乗り出して指を指す方向を見ると丁度バックをくわえた子犬がトコトコと歩いていた。

「行きます！」

美琴と固法さんが挟撃の形で子犬を追い詰めるが子犬は固法さんのスライディングタックルを避け固法さんはヘッドスライディングに

終わる。

「……こうなったら！」

そんな美琴の言葉を聞いた俺は嫌な予感を感じて美琴よりも早く子犬の正面に移動するべく脚に力を入れて瞬動をすると丁度美琴が子犬には当てない様に電撃の槍を放った所であった。

『ふんっ！』

俺はそれを氣で強化した腕で打ち上げる様にして弾き、走ってきた子犬をタイミング良く抱き上げる事に成功した。弾いた腕は多少痺れたが美琴…電撃の威力がありすぎだυ

『ほら、お前の口にくわえている物を返してくれないかな？』

抱き上げた子犬に俺はそう言うと子犬は素直に口にくわえたバックを離してくれた。

『有難う……ほら、美琴。』

「……ありがと。」

『まったく、小動物は総じて気が弱いのだからあんなに追ってますみたいな空気を出していたら逃げ出すに決まっているだろυ』

「それは……」

『それに、当てる気が無くとも普通に使うものじゃないぞ？』

「うっぅ……ごめんなさい。」

『ほら。』

「御坂さん！」

固法さんが向こうから子供達とあと長髪の活発そうな女子中学生と一緒に此方に向かってくる。

「……固法先輩、捜索物確保しました！」

「御苦労様、お手柄ね♪」

そして、固法さんが美琴から無造作に受け取ると美琴が血相を変えて爆発物処理班は等と言い始めて固法さんと美琴の認識の食い違いに気付いて時が止まった。

～～～～～～～

『ハァ～～～ぅ』

「あ、あの…大丈夫ですか？」

『大丈夫……と言うより君は？』

俺は広場のベンチで遠目から見ても分かりやすい位の深い溜息をつ

いていると心配げに見てくる先程の少女……美琴と同じ位な歳の子に声を掛けられた。

「あっ、わたしは佐天涙子っていいます！」

『そうか、俺は御坂戒翔よろしく。』

「は、はい…あの御坂さんは……」

『戒翔で良い、名字だと美琴と被るからな？』

「お兄さんですか！？」

『まぁ、書類上な…。』

「え？」

「兄貴ーー！」

名を佐天涙子と言った少女は俺の言葉に疑問を持った所で美琴が此方に大声で手を振ってくる。傍らには黒子と初春がいた……最初に見た時の険悪な雰囲気はなく、どうやら仲直り出来た様だな…。

『呼ばれているし、行くとするか…。』

「はい！……あっ！？」

『ん？』

佐天がそんな声を上げたものだから反射的に体ごと向き直ると此方

に向かって倒れ込んでくるのが見え、俺は支えようと後ろに重心をやるがそれが間違いとは後から気付いた。その後は推し量ってくれ。

「こ、この馬鹿兄貴ーー！？／／／／／／／」

『グハッ！？』

何故こうなったυ

7月18日　連続虚空爆破（グラビトン）事件（後書き）

『最後のはなんだぁーー！？』

「その方が面白いと思ったし、何よりこのまま進んだら佐天との絡みが無いと思って急遽この形を取らせて貰った次第ですな（笑）」

『最後には美琴からグーパンとかふざけるなよ！！！』

「戒翔命に近い設定になっているからしょうがないとしか言えないな…？」

『これからもこんな事が続くのか！？』

「良いじゃないか、このラッキー野郎が　（笑）」

『消し飛べ！風遁大突破ぁ！！！！！』

「あ～～れ～～！？」キラン☆↑星になる音

『ハァ、ハァ……こんな駄文生産しまくりな作者の小説ですが楽しみに見て下さい。それではまた次の話で！』

7月18日　学園管理者との会合そして…

あの後、美琴達と別れてから街をぶらついていた戒翔は土御門に電話で言われた事で第7学区の窓のないビルの前に来ていた。

『此処か…。案内役がいる筈だが……』

戒翔がそう呟き、辺りを見回していると不意に上から何かが落ちて来るのを感じ後ろに下がると花瓶が落ちてくる。

『空間移動能力…か？だが、何故……』

戒翔がそう思案するが先程の花瓶を皮切りに次々と自販機や標識果ては車と多種多様な物が降って襲い掛かる。

『まったく、粋な歓迎だが派手にヤり過ぎだな。使用者は……』

そう探していると不意に光……懐中電灯の光が当たるバス停の標識が消え、戒翔が反射的に横にズレると標識が落ちてくる。

『なる程……アレで物を移動させる為にロックしていた訳…か。能力名は座標移動（ムーヴポイント）って所か。後は光の出元を辿れば使用者に辿り着くって訳か。』

そして、躱しながら出元を辿ればあるビルの上に黒のジャケットに

中にサラシを巻いた少女がいるのが見えた。

常人にはそこまで地上からビルの上等と距離が遠く離れた場所は見える物では無いが戒翔は常人の数十倍から数百倍の視力を有している為に簡単に遠くのモノを見る事が出来るのである。

『夜は俺の得意な戦場（フィールド）の一つだと言う事を教えてやるかな……』

そう呟いた瞬間、戒翔に車が落ち、爆炎と黒煙に包まれる。

――side？？？――

統括理事の指示でわたしはある男の実力の見極めと可能なら消して構わないという事であるビルの上から目標の男が来るのを待っていた。

「あれかしら？」

わたしが案内役として入る窓のないビルに真っ直ぐに近付いて行く人影をわたしは懐から単眼鏡を手にその人影を見る

「中々のイケメンじゃない。アレが目標で可能なら消せ…か、勿体無いわね。ま、仕事だし割り切るしかないわね。」

わたしは自身の護身用兼能力を使用する為の懐中電灯を懐から取り出し、手始めにベランダにある花瓶へとその光を当て、目標の上に転移させる。

「……アレを避けるねぇ…中々の勘の持ち主って所だけど次はどうかしら？」

転移させた花瓶を咄嗟に避けた事に感心しながら次々に光を当てるがその悉くを避けながらその場を駆け続ける。

「男なら潔く潰れれば良いのに。これなら躱す事は出来ない筈……！！！」

中々当たらない事に苛ついたわたしは１０台近くの車を目標に落とし爆発を確認して笑みが零れる。

「やっとくたばったみたいね…？実力を見ろと言われたけど身体能力と危険察知能力がやけに高いって位だったわね……」

『……此処にいたか。』

「なっ！？」

わたしが爆発した場所を見ながら独り言を喋っていると誰かの喋る声が聞こえ、自身の周囲を見回すが誰もいない事に気の所為かと思ったがやけに耳に残る声に緊張が走り、警戒をする。

「今のは一体……」

『……捕まえたぞ。』

「ひっ！？」

な、なによ！コレは！足下から生えた手に掴まれると同時に先程も聞いた声にわたしはその得体の知れないモノによって恐怖に襲われる。そして足下から生えた手の次に現れたのは黒色に塗り潰された人型だった。

ーーーｓｉｄｅ？？？ｏｕｔーーー

『……捕まえたぞ。』

「ひっ！？」

俺が先程の爆煙と、業火を目眩ましにして、影の転移陣（ゲート）を使って此方を狙う、赤髪で二又で三つ編みにした少女の足を掴むと短い悲鳴と共に尻餅をついてしまっていた……。少し恐がらせすぎたか？

『お前が襲撃者…か？』

「あ、あぁ……」

『（恐怖の余りに思考処理が追い付かない様だな…。）俺は御坂戒翔だ。俺は君に危害を加えるつもりは無い。ただ、統括理事に呼ばれたに過ぎないんだ。』

「わ、わたしは結標沫希（むすじめ あわき）……」

『沫希…君は何故、俺を襲ったんだ？』

「それは……」

少女……沫希は言いづらそうな表情で口ごもる。

『暗部の仕事…か。』

「……あんたは何者なの？暗部の存在は普通は知り得ない事よ？」

先程の恐怖に強張った表情を一変させ、鋭い目をさせて此方を睨む。

普通はそうなるよな…。

『それは俺が普通では無いからな…。第一に学園統括理事長に会うのだから何かしらのアクションがあっても可笑しくは無いしな？君は統括理事長直轄と言うよりもその傘下の暗部の人間って所だろ？』

「……あまり深くまでは詮索しない方があんたの為よ。」

『御忠告傷み入るよ。それで君が案内役であってるかな？』

「えぇ、案内するわ。」

『その前に連絡先を教えて貰えるかな？』

「急に何？仮にも襲ってきた相手に連絡先を貰えるかって聞く？」

『なに、詮索をせずに沫希と話をしたいだけだ。』

「……変な奴ね？それはまた今度会ったら教えてあげるわ。」

『なら楽しみに待つとするか。』

「それじゃあ、行くわよ？」

『いつでも。』

そして、ビルの屋上から二人は消えた。

ーーー窓のないビル内部ーーー

『此処か？』

「えぇ、あのビルの内部よ？わたしは此処にいるから貴方はアイツに会ってくればいいわ。」

沫希の能力で内部に入るとやたらと機械の機材の様な物がゴタゴタした部屋にいた。そして、大小様々なケーブルが無数に伸びて奥へと続いている。

『沫希は統括理事が嫌いなんだな…。』

「アイツの事を好くもの好きな奴がどこにいるか知りたい位よ。」

『そうか、また後でくるからその時は宜しくな？』

「わかったわ。」

そしてその場に沫希を残し、奥へと進むと最初は薄暗かったものが

奥に進むにつれて明るさが増していく……そして

『貴方が俺を呼んだ本人か？』

「初めまして……そして、良く来たね御坂戒翔。わたしの名はアレイスター・クロウリー……この学園都市の統括理事長をしている者で君を此処に呼んだ本人だよ。」

奥へと続いているケーブルが集約された場所に到着すると円形の巨大なガラスの水槽ケースの様な生命維持装置に、白髪に肌が白く囚人服を着た男とも女ともとれる人間が逆様になって浮かんでいた。

『……用件はなんだ？俺は貴様と話す事はない』

「……欠陥電気量産計画（レディオノイズ）」

奴の言葉に反応し、眉間に皺を寄せ、俺は少し怒気を発してそれに返す。

『……何が言いたい？』

「止めたくは無いかね？絶対能力者進化（レベル６シフト）計画を……」

『貴様になんの益がある……』

「なに、わたしもアレには些かばかり経費の浪費を感じていた所だからね…ソレを抑えねばと思ったに過ぎないよ。これでも学園都市

の統括理事長と言う人間の前に経営者と言う人間なのだよ？」

『貴様に言われなくともアレは近い内に叩き潰す……これ以上俺の妹達を苦しませない為にな……』

「アレは人間（ひと）として扱う必要が……」

『黙れ…。貴様のその言い方は俺の感に障る。これ以上妹達の事を実験動物（モルモット）扱いするな！！！』

「済まないな…、コレはわたしの性分なものでね。」

『その前に……貴様は何が望みだ……』

「君のＤＮＡマップ……」

『俺の…だと？』

「君の物はあらゆる方法で採取しようと試みたが全て失敗に終わっていたからね。この計画を止める代わりとなるが君のＤＮＡマップを提供して欲しいのだよ。」

『妹達（シスターズ）の命の保証はするか？』

「君の返事によるな…。」

『俺の細胞は解析に時間が掛かると思うぞ？なにせ……人間（ひと）の殻を被ったモノだからな。』

一瞬で血の色の様な瞳から瞳の周りを黒に変化させ、瞳の中心は爬

虫類の様な形の金色にし、重圧のある殺気を辺りに撒き散らした。

「……些細な事に過ぎない。それに君のＤＮＡマップの方が軍用量産型としては現実的な気がするのだよ。」

一拍を置き、アレイスターは無表情のまま言い放った。

『……ふん！喰えない奴だな。』

俺はそう良いながら徐に二の腕を短刀で浅く切り裂き、其処から滴る血液を魔力で精製したビーカーの中に約１０ＣＣ程入れた。

「君は魔術師か？」

『魔術師ならば超能力は使用出来ないだろうが……』

「君はやはり面白い……見ていて飽きないよ。」

『言ってろ……用は済んだ、俺は帰らして貰う。』

「わたしとしてはもう少し話をしたいのだがな？」

『……人間風情（ヒューマン）が俺を嘗めるなよ…？』

俺は先程の瞳のまま先程とは比べ物にならない程の殺気をアレイスターにぶつけるが奴は気ほども動じずに薄気味悪い笑みを浮かべて此方を見ているだけであった。

『……狸が』

俺はそのまま踵を返してその場を後にした。

―――アレイスターｓｉｄｅ―――

「人間風情…か、あの言葉から意味する事はやはり我々とは違う次元の存在か。神や悪魔はたまたそれすらを超越した存在か……」

あの瞳は人がする物ではない……それにわたしに向けたあの尋常じゃない殺気……表に出さない様平静を保っていたがアレ程の物を持つ彼は……

「やはり興味深い……彼が何れわたしの計画に協力したならば……いや、それは無い…か。彼は生命（いのち）を尊重していたからね……」

計画に参加協力が無理ならばそれでも構わない……彼のＤＮＡマップが手に入ったのだからわたしの計画は更に進むだろう……

「〔聖守護天使〕の顕現化……虚数学区に世界樹設計図（ツリーダイアグラム）、幻想殺し（イマジンブレイカー）……そして学園都市に侵入した禁書目録（インデックス）……鍵は揃いつつある……そして、彼のＤＮＡマップによる軍用量産型……計画に懸念されるとすれば彼位…か。」

彼の置いていった血液サンプルを見ながら彼の行動がどの位の支障が出るかは計り知れないな…。

7月18日　学園管理者との会合そして…（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

7月19日　セブンスミスト爆破事件

ーーーセブンスミスト7階ーーー

「佐天さん、これ可愛いですね！」

「確かに可愛いけど…値段がυ」

「あっυ」

「戒翔さんはどっちが可愛いと思います？」

『女性の感性と男である俺の感性は違うぞ？』

「男の人から見てどう思うか参考にしたいんです。」

『俺から言わせれば二人共素材が良いのだから何を着ても栄えると思うぞ？』

「素材？」

『可愛いって事だ。』

「「／／／／／／／／／／／／／／」」

『何故そこで固まる？』

「戒翔さんって狙って言ってます？／／／／／／」

『何をだ？』

「佐天さん、戒翔さんは素で言う人ですよ♡」

「真顔でアレは反則だよ♡」

「～～～兄貴！ちょっと来て！」

『何だ？ってそんなに強く引っ張るなよ。』

俺は美琴に連れられて寝間着売り場らしき場所へと来た。そして、美琴が深刻そうな顔でパステル調の寝間着服を見ていた。

「兄貴はこの服……」

『……美琴が欲しいのなら良いんじゃ無いのか？』

「でも端からみたら子供っぽいって……」

『他の奴が言う事を一々聞いていたら好きな物は買えないぞ？それに趣味趣向は個人の自由だからな？』

「…うん。」

『……ちょっと待ってろ。』

「え？」

困惑する美琴をその場に残し、俺はその場に置いてある服を手に取り、レジへ向かった。

『コレの会計をお願いします。』

「はい……〇〇〇〇円です。」

『コレでお願いします。』

会計に行き、金額を聞いた後に戦車すら買える某黒いカードを出して会計を済ませる。その際に会計にいた人間が目をまん丸くしていたのはどうでも良い事だ。

『……ほら』

「えっと……」

『踏ん切りがつかないから買ったまでだ…。別にいらないならいいが…な。』

「ううん、有難う兄貴！」

「御坂さん、何を買って貰ったんですか？」

「えっ！？えっと……内緒♪」

「えぇ～、気になるじゃないですか！戒翔さん、御坂さんに何を買

ったんですか？」

『本人が内緒と言ったのだから教えられないね？それよりもそろそろお昼にしないか？時間も良い頃合いだしね？』

「確かに気が付けば１２時前ですね。」

『近くのお店で食べる様にしよう。』

そして此の階の近くにあるファミレスに入る俺達は案内された席に座る。

『さて、何を食べるかな。やっぱり無難に日替わりかな…？』

「わたしはミートスパゲティかな。」

「わたしも佐天さんと同じ物にします。」

「なら、わたしはステーキセットに決まりね。」

『決まったな。すいませーん！』

「お待たせしました、御注文の方をどうぞ。」

『ミートスパゲティを２つに日替わり１つでステーキセット１つをお願いします。』

「畏まりました。」

そして、ウェイトレスが離れた後……

「御坂さんが羨ましいですよ…、こんなに格好いい人がお兄さんだなんて…わたしが一番上だから一度で良いから甘えてみたいな～。」

「わたしは兄弟がいないから解りませんが御坂さんを見てると兄弟って良いですね？」

「あはは／／／／／／」

『ま、手の掛かる自慢の義妹（いもうと）だな…。』

「あ、兄貴～？」

『ははは、まっ、こんな手の掛かる義妹だがこれからもよろしく頼む。』

「そ、そんな？わたし達の方が御坂さんと仲良くさせて貰ってるだけで……」

『…それでもだ。コイツは…美琴は超能力者（レベル５）って肩書きで表にはあまり出さないが淋しい思いをしているからな…、普通

の友達いや、親友と呼べる奴が少ないから……』

「兄貴……」

「御注文をお持ちしました。」

『さっ、なんか辛気臭い雰囲気になっちまっ……「かいやん、何をしてるのにゃ〜？」……土御門元春なんで貴様が此処にいる…』

「俺がどこにいようと俺の自由ぜよ……それよりもなんで『済まない、美琴達はそのまま昼食を取っていてくれ、俺はこの阿呆と少し話をしてくる。』って、ちょっと耳は痛いぜよ！女の子を扱う様に」

『黙れ！貴様をその様に扱う訳が無いだろうが！！！』

そして美琴達が唖然としている間に戒翔は土御門の耳とレシートをひっ掴み会計を済ませると店内から出て行った。

「戒翔さんの友達…かな？」

「派手な人ですね？金髪ピアスのグラサンでしたね？しかもアロハシャツみたいな物着てましたし……」

「兄貴から聞いた事あるけどあの人との関係は友達って言うより悪友に近いって……」（兄貴の奴どさくさに紛れて会計してったけど初から自分が払うつもりだったわね…。）

そして、美琴達がそんな事を話をしている時に店内を出た戒翔と土御門と言うと……

「結構痛かったにゃ～υ」

戒翔にあのまま引きずられたのか赤くなってしまった耳を撫でながら冷や汗を流す土御門と対象的に表面では冷静に見える戒翔だが義妹とその友達との買い物を邪魔された事により内心では怒りを抑えていた。

『…で、この様な場所まで来たのはなんだ？まさかまた軟派でもしに来たのか？』

「そんな事じゃない、戒翔…お前がアレイスターに血液サンプルを渡したのは本当か？」

俺が茶化した様に話すと土御門が急に真面目に話し始めた。本題と言うか今回わざわざ来たのはその為か……

『本当だが……それがどうした？』

「いや、確認の為に聞いただけだ。」

『……何か問題があったのか？』

「お前の血液サンプルから造られた生物が化物に変異して研究所１つを消滅させたらしいんだ。」

『…やはりな。』

「わかっていたのか！そうなる事が…」

『当たり前だろう？俺は？ヒト？の形をしたナニカなのだからな……。で、その生物は？』

「警備員の部隊で追い詰めたが仕留め切れずに逃走を許してしまったよ。」

『追い詰めたって事は相当な深手を負わした訳…か。』

「まぁ、当分の間は動かない筈だが注意だけはしておいてくれ。」

『ふむ、忠告は受け取っておく。しかし、土御門は何故セブンスミストに来ているんだ？』

「それは女子の観察に決まってるぜよ！」

『……聞いた俺が馬鹿だったようだな。話はそれだけなら《店内にて電気系統に故障が見られた為にお客様に御迷惑をお掛けしますが本日の営業は閉店とさせて頂きます。》…故障？どういう事だ？』

「取り敢えず外に出た方が得策ぜよ。」

『外にはテメェ1人で行け、俺は風紀委員として調べる。』

「気を付けろよ？」

『誰に言ってるんだ？早く元春は早く外に出てろよ？』

「言われるまでもないぜよ！」

土御門が遠ざかるのを確認し、直ぐに初春達の気配を探り出して現場に急行する。

『初春、美琴！』

「兄貴！？」

「戒翔さん！？」

『何があった？』

「此処で重力子の爆発的な加速が観測されましたのでお店の人に説明をしてお客の皆さんに安全に避難して貰ったんです。」

『風紀委員の初春は良いとして、美琴は何故まだ中にいる？』

「わたしはアイツの連れてた女の子を探してたんだけど……」

『アイツ？』

「兄貴と高確率で一緒にいるツンツン頭よ。」

『……アイツ……また厄介事を』

戒翔がそんな事を呟いていると

「風紀委員（ジャッジメント）のお姉ちゃ～ん♪」

『ん？あの子は昨日の……』

昨日の鞄を無くした少女が不細工な蛙の人形を抱えて初春へと近づいた。

「どうしたの？」

「はい、これ♪眼鏡を掛けたお兄ちゃんが風紀委員のお姉ちゃんにって♪」

少女が人形を手渡した瞬間、人形の頭部が窄まる。

「はっ！」

それにいち早く気付いた初春は少女の手から人形を奪い取る形で取ると自身の背後へと投げると少女を庇う様にして抱える。

「気を付けてください！アレが爆弾です！」

「あんな物…しまっ！？」

初春の言葉に美琴がポケットからタングステン綱製のコインを取り出したが指を滑らしてしまい、爆弾と化した人形は爆発の臨界点を迎えようとしていた。

『ちぃ！！！（原作とは違うが……俺が叩き壊す！！この質量を持つモノであるならば破壊が可能な物質破壊（マテリアルバスター）ならば！！！）』

戒翔はすぐさま美琴達の前に踊り出ると左手を腰溜めに構える。そして、眩い閃光と共にフロア全体が爆発に包まれる……筈であった。

『無事成功…か。初春、後の事は任せた。』

「えっ、戒翔さん？」

初春が困惑している間に俺はさっさとセブンスミストを出ると少女の言っていた眼鏡を掛けた人間で不審な動きをする奴を捜すと……

『いた…。あんな所で見学か？』

そして、見つけ出した後は簡単だった。瞬動を使ってビルとビルの間に隠れる様にして立っていたヘッドフォンを付けた如何にも虐められてそうな男子学生の真横に気配を断って近づいて一気に横腹にミドルを入れて奥に蹴飛ばす。

「ぐはっ！？な、なにが……」

『よう、爆弾魔さん？』

「なっ！？なにを根拠にそんな事を言うんだい？」

『ふぅん？まっ、セブンスミスト内にあった爆弾は不発に終わって怪我人０に加えて建物への被害もほぼ皆無だし、問題は無かったな…。』

「なっ！？そんな筈は！確かに僕の最大出力を使った人形を女の子に渡して風紀委員を狙ったんだぞ！？」

『ほぉ？』

簡単でなお且つあからさま過ぎる誘導尋問に眼鏡を掛けた少年は興奮して自分が犯人だと言っている証言をする。

「あ、いや…確かに無事でなによりだ……っね！！！」

少年がスプーンを投げるが戒翔の胸にただ当たるだけであった。戒翔の能力の１つ空間支配（エリアマスター）により戒翔の許可が無ければ戒翔の指定した範囲内の能力は使えず、更にその空間内では戒翔の意志で物全てを操つる事が可能なのである。

「はぁっ！？」

『重力子で俺を倒そうとしたようだが既にこの場は俺の領域（テリトリー）だ。意味は解らなくて良いぞ？理解した所でどうしようも無いのだからな？』

「クソっ！いつもそうだ！力の強い奴は偉そうにして弱い奴を見下して虐げる！それを裁いて何が悪い！」

『だからと言って力で仕返しした所でその虚しさが癒えるのか？そ

もそも力でやり返した所で更に同じ様にして力でやり返されるだけだ……』

「お前に何が解る！！！力でやられたから力でやり返してやっただけだろうが！！！」

『力…力と馬鹿の１つ覚えの様に繰り返し、その上貴様を虐めた奴とは関係ない者を狙う卑怯者……そして！』

「ひっ！？」

『人に向けてあの様な規模での爆発を用いている時点での明確な殺意！貴様が怪我を負わせた又は死なせる様な事があったら貴様はその十字架を背負えるのか！』

「僕を助けてくれない奴なんていない方がマシだ！！！」

『テメェ自身で助けを呼んだのか！向こうから手を差し伸べるのを待っている様な奴は俺は大嫌いなんだよ！！！』

「ヒィッ！？」

『歯ぁ…食いしばれや！！！！』

「ぐはッ！」

『復讐…それは結構！だがなそれを方向（ベクトル）の転換をするだけでお前はもっと別な可能性に行き着いたかも知れないな？……過ぎた話だがな。黒子…後は頼む、俺は少し用を思い出した。』

「解りましたわ。後の事は、この黒子にお任せ下さいな。」

黒子の言葉を背に受けながら俺は人の雑踏の中へと消える。

7月19日　セブンスミスト爆破事件（後書き）

『俺ってこんなキャラだったか！？』

「話の上と言うか多数の世界を渡り歩いた結果の所為かな…？まだ全てを出した訳じゃないけどね？」

『眼鏡の少年となっていたが…一般人相手に軽い覇気を当てるのは些かどうかと思うぞ？』

「それ位しないと面白く無いだろう？」

『現在は超電磁砲がメインだが…禁書目録にどう関わって行くか決まっているのか？』

「まぁ、ね。時系列で言えばＡＩＭビーストを潰した頃に首輪破壊イベントもあるし、その前にもこの話の次の日には禁書目録が原作だとベランダに干された状態で遭遇していたしね？」

『だが、それは正確な物では無いのだろ？』

「まぁ、若干の捏造は仕方ないと思う…Ｗｉｋｉを見ても正確な時系列を記してはいないからね？」

『まっ、そこは作者たる貴様の力量次第と言った所かな…。』

「後は当麻のフラグをある程度をへし折ってそのへし折ったフラグを戒翔に♪」

『それが貴様の目的かぃ』

「オルソラとか神裂姉さんは当麻なんかに勿体無さ過ぎる！！！」

『戯れ言は其処までにして次回の見所なんかを言ったらどうだ？』

「……そうですね。」

『あからさまにテンションが下がったな…。』

「だが！次回は神裂姉さん達が登場するのだからテンションはアゲアゲで行きますよ♪」

『テンションが変に上がり過ぎて変な話にならなければ良いが……』

「確実に赤髪不良ロリ神父ことステイル・マグヌスは弄りキャラと化す予定だ♪」

『被害者に黙祷を……アーメン。』

7月19日　必要悪の協会（ネセサリウス）の魔術師達との会合

『はぁ、何処の馬鹿だ？学園内部で魔術行使とかふざけた事をしてるのは……』

俺は黒子に一連の連続虚空爆破事件の犯人を任せた後に魔力反応のあった場所に向かうと簡易版人払いの結界を居住区のド真ん中に張られている所をすり抜けると炎の魔神が修道服を着た少女を追い掛けていた。

『（アレか…）おい、こっちだ！！！』

「だ、駄目！逃げて！？」

炎の魔神は此方の声に反応して、此方に迫り、それを見た少女は制止の声を上げる。

『たかだか摂氏三千度の炎が俺に勝てるかよ！劫火炎掌…イフリートぉッ！！！』

戒翔がそう叫ぶと同時に両脚と両腕…そして両の掌から紅蓮の炎が吹き上がった。しかしそんな事などお構いなしとばかりに炎の魔神…魔女狩りの王（イノケンティウス）は戒翔にその大きな手を突き出して突進をしてくる。

『吹き飛べ！劫掌破！！！』

戒翔は迫り来る魔神の懐へと潜ると炎とそれから生ずる熱波を纏った掌底を叩き込むと十メートル先にある交差点辺りまで吹き飛ばし

た。

『そこの！逃げるぞ！』

「えっ！？」

修道服を着た少女の返事を待たずに戒翔は少女を脇に抱えるとその場から跳躍をして人払いの結界外へと離脱した。

『（ったく本当に面倒だな…コイツの着ている服に魔術式の防壁に探知の魔術が練り込まれている…か。目的は解らないがさっきの奴がまた狙ってくるのは確実だろうな……）』

「あ、あの！」

『なんだ？もう少し連中から離れるまで待て』

「あなたはなんでわたしを助けたの？なんの利益も無いのに。」

『は？』

「なんであなたは危険だと解っていながら何故あの場所にいたの？」

『単なる見回りだ。俺は風紀委員（ジャッジメント）の一員だからな……学園内に異常があれば可能であれば解決するのが仕事だ。それ以前に助けるのに理由が必要（いる）のか？』

「え？」

少女が困惑している中、歩道に着地すると脇に抱えていた少女を地に下ろした。

『理由なんて無くても其処に助けを求める奴がいるのなら俺は迷わずに手を差し伸ばすだろうな……』

「……か」

『なんだ？』

「ううん、何でもないよ。助けてくれてありがとう。わたしはインデックスって言うんだよ。」

少女は戒翔の前に行き正面を向くと向日葵の様な笑顔で自己紹介をするのであった。

『禁書目録（インデックス）か。俺は御坂戒翔だ。１７７支部所属の風紀委員で高校１年だ宜しく。』

「これからどうするの？」

『取り敢えず視覚阻害（ダミーチェック）で身を隠して学生寮に戻る…お前…インデックスも一緒だからな？』

「なんで？これ以上わたしといても危険なだけなんだよ？」

『危険？なにがだ？危険な事なんて仕事で幾つも行ってるし今更だ

な…。第一このままはいサヨナラ？真夜中にインデックスみたいな子供を外に出しておく方が危険だと判断しただけだ。』

「わたしは子供じゃないよ！れっきとした１４歳なんだよ！」

『そうなのか？（言動から小学生位かと思ったなぅ）』

「いまわたしに対して失礼な事を考えたでしょ？」

『……なんの事だ？（勘の鋭さはとんでもないな）そろそろ着くぞ』

「あの建物？」

『そうだ。』

戒翔とインデックスはゆっくりとした歩調でマンションに入るとそのままエレベーターで四階に上がる。

「かいとの部屋は何処なの？」

『此処を真っ直ぐ行って四つ目の扉の所だ。』

「此処？」

『鍵を開けるからちょっと待て。』

そしてガチャンと鍵の開く音と共に扉が開く。

「わぁ～、男の人にしては意外かも」

『なにがだ？』

「わたしの知ってる知識では男の人は家事が出来なくて部屋は散らかっている筈なんだよ？」

『それはだらしないと言うか出来なさすぎだ。俺はまぁ、1人暮らしする前は妹がいたからそれもあると思うがな…。』

「かいとにいもうとがいるの？」

『あぁ、手の掛かる妹達がな……インデックスは飯は何が食べたいんだ？』

「えっとね～……オムライスがいいかも♪」

『任せろ。』

―――戒翔、台所にて調理中―――

『出来たぞ』

「すごく美味しそうかも♪」

インデックスの目に映ったのはふっくらした卵に包まれたケチャップライスとその上には日本の国旗を乗せた物で所謂お子様ランチと言う物が出て来たのである。

『口に合えばいいがな』

それを戒翔は台所で洗い物をしながら言う。そして……

「ご馳走様でした♪」

『お粗末様でした。』

「このオムライスすごい美味しかったよ♪」

『そうか。インデックス、風呂を沸かしたから入ってこい。着替えは取り敢えず乾くまで俺のシャツでも着ておいてくれ。』

「ご飯にお風呂まで良いの！？かいとは神様かも♪」

『（言動が一々的確過ぎやしないかい）それは言い過ぎだ。』

「そんなことはぷっ！？」

『いいから風呂に入ってこい。ドライヤーは洗面台にあるから上がったらちゃんと乾かせよ？』

「はーい♪」

戒翔の言葉にインデックスは元気良く返事をして浴室に入って行った。

『さて、今の内に毛布を出しておくか。』
暫くして……
「ひゃぁ！」
『ん？』
浴室からインデックスの悲鳴が聞こえ、何事かと戒翔が思った直後
「かいとー！なんかこの筒から熱風が出て来たー！？」
『ドライヤーか？（筒って科学でも割と浸透している物なんだがw）インデックス、服を着てから首周りにタオルをまいてこっちに来い。』
「わかった～♪」
インデックスはそう言うやいなや戒翔の貸した白のカッターシャツを着て出て来る。
『其処の椅子に座って後ろを向いてろ。』
そして発火能力（パイロキネシス）と風力使い（エアロシューター）を使用して熱風擬きでインデックスの銀の長髪を優しく梳きながら乾かす。
「かいとは髪の扱い方が上手かも」

『まぁ、妹の髪も同じように乾かしていたからな？』

「そうなんだ。」

『これで終わりっと、インデックスはそこのベッドを使いな』

「かいとは？」

『俺はそこのソファーで十分だ。第一その格好で布団以外で寝かせたら風邪をひかれでもしたら面倒だからな…。理解したら寝な』

「うん、おやすみ♪」

『あぁ、おやすみ。インデックス』

そして、インデックスがベッドに入るとすぐさま寝息が聞こえてくる。

『寝付きが良いのかはたまた逃亡による疲労かどちらなのかな…アイツは確実に気付いてるだろうな…観察（みて）るんだろアレイスター貴様が滞空回線（アンダーライン）で此方を監視しているのを知らないとでも思ったか？』

直後、戒翔の携帯が鳴りそれを取る。

《君は色々と知ってる様だね？》

『知らないとでも思ったか？表の人間なら良かったが俺は裏の人間だからな…。』

《禁書目録を君が保護してくれたのは誤算だったよ》

『……大方当麻にでも会わせる心算だったのだろ？その事については当麻に任せるから安心しろ。俺はアイツの面倒を見るのは本当に危険になってからだ』

《それを聞いて安心したよ。禁書目録とアレが会合をするのは必然なのだからね》

そして、アレイスター側からの通話が切れる。

『さて、俺は幻想御手の方の解決を優先させてもらうかな…。（そろそろ佐天が幻想御手を使用する時期…か。）悪いが涙子にはそうなってもらわないと現状が動かないからな…。解っていながら動かない俺はあいつ等にどう見えるんだろうな。…兄貴失格だろうな』

そう言いながら戒翔は毛布を被り意識を暗い闇へと落とした。

7月19日　必要悪の協会（ネセサリウス）の魔術師達との会合（後書き）

御意見と御感想をお待ちしております。

7月20日　脳医学者（キヤマハルミ）

♪～♪～♪～

翌日の昼、部屋にいた戒翔の携帯に着信のアラームが鳴った。

『もしもし？』

「あ、兄貴？今大丈夫？」

『まぁ、大丈夫だ。』

「そう、ならさいまから黒子と一緒にちょっと病院に行く事になってさ……」

『……なにかあったか』

「……うん。兄貴はあの爆破事件の犯人を覚えてる？」

『…確か眼鏡を掛けたモヤシみたいな奴か？』

「……ソイツなんだけど警備員との取り調べ中に倒れて……意識不明で病院に運び込まれたの」

『……確かなのか…それは？』

「黒子の話だとそうみたい。黒子としても兄貴の意見も聞きたいんだって」

『……場所は？』

「第7学区にある医療施設…瑞穂機構病院よ。」

美琴の言う病院に戒翔は未だに寝ているインデックスに書き置きをして直ぐに向かうそして……

「兄貴！」

「お兄様待っていましたわ。」

『あの眼鏡は？』

「彼方の病室ですわ」

戒翔が病院に到着するとロビーには美琴と黒子がおり、戒翔が来た事で二人は戒翔に近づく。そして、黒子の案内で病室に入ると事件の時にいた眼鏡の少年の他にも何名もその病室にいたが少年と同じ様に意識不明となりベッドに横たわり点滴の様な物を取り付けられていた。

『（他の奴らも眼鏡と同じで幻想御手（レベルアッパー）を使用したと言う事か）あいつの名は？』

「名前は介旅初矢（かいたびはつや）バンクでは異能力者で能力名は量子変速（シンクロトン）ですわ。

ですが事件当時の能力は大能力者に匹敵致しますの。」

『そうなると…やはり幻想御手…か。』

「やはり。」

『此処に寝ている人間は全て使用した者か？』

「はい。お兄様が関わっていない者もいますが全て幻想御手の使用者と見て間違いないかと……」

『（つまり、幻想御手は使えば能力は上がるがその何らかの副作用で昏睡状態に陥ると……待てよ？そもそも幻想御手が何らかの副産物だと仮定すればそれは副作用ではなく…確定事項になる…か。仮説の域を脱するには証拠が少ないな…。せめてその幻想御手の正体が解れば……）』

「兄貴？兄貴ってば！」

『ん、なんだ？病院は大声を出す場では無いぞ？』

戒翔が介旅が意識不明になった事に疑問視すると他にも考えてみると幾つもの問題点が浮上してくるが美琴の声に意識を思考の渦から離してみると呆れ顔の美琴が戒翔の顔を見ていた。

「もう！さっきから呼んでるのに兄貴が返事をしないからでしょ！」

『む？それは済まん。どうしても考え事をしてしまうと…な？』

「まったく兄貴の悪い癖よ？昔からそうだったし……」

「そうなんですの？」

『何時もそうなんだが治そうとはしてるんだがな。それでどうした？』

「いえ、この病院の主治医に話を聞こうと思いますわ。」

『そうか。』

そして、此処の病院の主治医に話を聞く事になり、主治医の下へと3人は歩いていく。

そして……

「風紀委員の白井黒子ですわ」

『同じく御坂戒翔だ』

「御苦労様です。」

白井は腕に付けた腕章を見せ、戒翔は自作の手帳に正式な風紀委員の刻印を入れた物を見せると看護婦が挨拶をする。

『容態は見て確認したが原因は解りますか？』

「いえ、我々も最善の手を尽くしましたが依然として原因の解明には……」

戒翔の言葉に医者と思しき人物は眉間に皺を寄せて苦い表情をする。それだけで彼が医者として患者達を救えない事を歯痒く感じている事が戒翔には見てとれた。

『意識を失う前の事は解るか？』

「解りません……此処に運び込まれた時には既に意識不明でしたので原因解明の手掛かりが……」

『（そうなるとやはり先程の仮説が強まってくる…か。精神面の問題か又は他の要因が存在するか…か。）今の時点では手掛かりは無し…か。』

「この様なケースは稀ですの？」

「以前までは稀でした…が今週に入ってからはこの症例と同じ患者が次々に運び込まれています。」

医者の言葉に美琴と黒子は驚き目を見開き、戒翔は訝しげにしつつこの事態について思案する。

「また、他の学区の病院も事態は同様でこの症例が回復したと言う報告は聞いておりません。」

『感染症という線は無いのか？』

「いえ、それは無いはずです。関係者への二次感染も見られません

ので……」

『とすると……幻想御手か？』

「確証はありませんがそうなると事態は間違いなく深刻になりますわね…。」

戒翔が小声で黒子に聞くと黒子が苦虫を噛み潰した様な表情で戒翔に答える。

『（このままだと被害が拡大するばかりか昏睡者も増え続け問題になるな……一刻も早く正体を掴めれば良いが……）』

戒翔がそんな事を考えていると

「情けない事ですが私どもには手に余る事態ですので、外部から大脳生理学の専門チーム（スペシャリスト）を招きました。間もなく到着する頃かと」

医者が掛けている眼鏡をクイッと上げながらそう告げると後ろからハイヒールの音がなり戒翔達が後ろを振り向くと1人の女性が立っていた。

「お待たせしました。瑞穂機構病院院長より招聘（しょうへい）を受けました、木山春生（やまはるみ）です。」

女性の容姿は茶髪のウェーブがかかったボサボサのストレートに白衣のポケットに両手を突っ込み目の下には多忙のためか隈（くま）があり気怠そうな目をしていた。

そして、介旅の検査が始まりその間は戒翔達はロビーで待つ事になっていた。

待つのは良かった。しかし問題があった。

「あっついわね？冷房が入ってないのかしら？」

「申し訳ありません。なにぶん昨夜の落雷が原因の様で送電線が断線してしまいまして、自家発電による最低限の電力供給のみでしたもので、病棟や医療機器に電力を全てまわしているものですから……」

『それならば仕方ないな…。』

美琴の言葉に通り掛かったナースがその疑問に答えた。すると美琴と黒子が気まずい顔をして顔を逸らし、戒翔はそんな2人の反応で何かをやらかしたなと直ぐに理解した。

『お前達は何をやらかしたんだ？』

「え…いや…えっと……」

「幻想御手の手掛かりになりそうな人物達といざこざを変電所の近くでしましたの」

『ほぉ？』

「ちょっ！黒子！？」

「わたくしの話も聞かずにお姉様が始めてしまったのですから自業自得ですわ。」

「兄貴にバレる事が一番マズいって『どうマズいんだ？美琴』…これには深い訳が」

「お話の途中に悪いですがどうやら終わったみたいですわ。」

そう告げた黒子の方を見れば先程の白衣を着た女性が此方に来る所であった。

「君達が担当の風紀委員かな？」

「白井黒子と申しますわ。」

『御坂戒翔だ。』

「待たせたね、一通りのデータ収集は終わった……其方の彼女は？」

「あ、御坂美琴です！」

「御坂…美琴？もしかして常盤台の超電磁砲（レールガン）かね？」

「は、はい。そうですけど、知ってるんですか？」

「お姉様は御自分が学園都市の誇る7人いる内の1人だと言う事をもう少し自覚して下さいな。それで意識不明者の方々は治りますの

？」

「私は医者じゃないから治す事は出来ない…が、こうなった原因を究明するのが仕事だからね。……それにしても…」

木山はその気怠そうな表情のまま淡々として告げる。

「暑いな、ここは…まるで蒸し風呂だな…」

『落雷による送電線の断線で回せる電力がないらしいからな…。』

「そうか…災害ならば仕方ないな」

「あ…あはははは」

木山の零した言葉に美琴は自分が引き起こした事を自覚しているのか渇いた笑いをする。

「さて、全員揃っている所で改めて自己紹介をしておこう。私は木山春美。大脳生理学を研究している者だ。専攻はＡＩＭ拡散力場……能力者が無自覚に周囲へと放出している力の事だ。」

『成る程な…。』

「あの…それで何かわかりましたか？」

傍にいた医者が戸惑いがちにそう言う。

「それはまだ…収集したデータを研究所に持ち帰って精査しない事にはなんとも言えませんね。」

「データなら、此方から送る事もできましたのに、ご足労掛けて申し訳ありません。」

「いや、そんなデータだけでは解らない生の情報というのもありますし、学生達の健康状態が気にもなりましたので……」

『（絶対に違うだろ？あれはそんなものじゃなくて暑くて暑くてしょうがないという表情だろ）』

戒翔は内心で木山の言葉にツッコミを入れる。そこへ黒子が口を開く。

「あの、お尋ねしたい事がありますの……幻想御手について…」

「幻想御手？」

黒子の告げた言葉に不思議とばかりに黒子の言葉を繰り返す。

「はい。ネット上で広まっていり噂なのですけど…」

「それはどういったシステムなんだ？」

「それはまだ…」

「形状は？どの様にして使う物なんだ？」

「わかりませんの…」

『（黒子…いや、あの木山って奴が先手を取ってしまったから実質なにも解らない事を告げるだけになってしまったか。）』

「それでは何とも言えないな…」

木山はそれだけ言うとネクタイを緩める

「それは…そうなのですけど…実は植物状態の学生の中に…」

黒子がなおも話を続けるが木山は緩めたネクタイを取ると羽織っていた白衣を脱ぎ、更にはカッターシャツのボタンを全て外して脱ぎ……

「ふぅ…暑いな…」

上半身だけ下着姿になった。

すると、美琴に黒子、そして当然の事だがそばにいた医者の表情（かお）が真っ赤になる。

『（平然として脱いで……コイツは露出狂か？枝先の話とはかけ離れ過ぎやしないかし）』

戒翔はそう思いながらも回れ右をして珍騒動が収まるのを待つのであった。そして……

「此処なら落ち着いて話が聞けますわね。」

そう告げる黒子とその隣に戒翔に美琴で反対側に木山という席で座る。何故、此処に来たかと言うとあの病院の中にいては木山が何度も脱ごうとする為に近場のファミレスに涼む為のと木山の露出狂癖の防止で来る事になっていた。

「さて、先程の話だが……同程度の露出で何故水着が良くて下着がダメなのか……」

「「『いや、そっちじゃなくて』」」

「あれ？」

木山のハズれた議論に戒翔達はシンクロしてツッコミを入れる。それに木山は不思議そうな顔をする。

『話を纏めるぞ？（マジで天然が入ってないかｕ枝先の話だともっと真面目な人だと聞いたが……昔の話だからか？）』

戒翔が内心で呆れながらも先程の病院での話を再度木山に話をする。

「あー…つまり、ネット上で噂になっている幻想御手なる物が存在している可能性があり、君達はそれが昏睡した学生達に関係しているのではないか……と、そう考えている訳だな？」

「はい。」

『今の所、判明と言うか解っている事はこの位だな？』

木山の言葉に黒子と俺は頷く。

『上の連中では注意と言うか警告に近い物を学生達に呼び掛ける…って案も出たんだが、まだ実態が判明しない上にアレの情報開示で被害の拡大を危惧した為に現状では公表を見送って幻想御手の存在の有無を調査をする事が決まっている。』

「……なる程な」

戒翔が風紀委員の現状を黒子を含めた3人に告げると木山は頷く。

「君達の仮定が正しいとするならば妥当な判断と言えるな……能力の強さが簡単に上がると言った効果に使用者が植物状態になると言った情報が一人歩きした日には……目を覆いたくなるな…。…で、そんな話を何故私にする？」

『能力の向上……つまり脳に干渉するシステムの可能性が高いと考えたからだ。意味は解るよな？』

「つまり幻想御手の現物があり、見つかった場合に私にそれの調査をして欲しい…と？」

『そう言う事だな。』

俺が木山に含みを込めた言葉で告げると木山も理解していた様で即答して来た。伊達に研究者では無い…か。

「構わんよ、寧ろ此方から協力をお願いしたい位だよ」

「ありがとうございます。」

『（寧ろ此方から…ねぇ？）どうも。』

木山が目を閉じながら黒子は頭を下げて礼を言い、戒翔は憮然とした態度で答えた。

『……それにしても何時まで放置するんだ？』

「何が？」

「ちょうど良かったよ。私もさっきから気にはなっていた所だよ。」

「何ですの？」

『「アレ。」』

木山と戒翔が顔を向けた先を黒子と美琴が見るとガラス窓の向こうからへばりついた状態で此方に笑顔を向ける佐天と傍らには申し訳無さそうな表情（かお）をした初春が立っていた。

『（３０分近くへばりついていて注目の的になっている事に気が付かないのかアイツは ｕ）』

戒翔は最初から気が付いていながら話題にも出さずにいた事はこの際無視しておく事にする。そして…

「ほぇー、脳の学者さんなんですかー」

「よろしく。」

初春と佐天も相席となりそれぞれに注文をしたが……デカイパフェを頼むな、おい。見てるこっちが胸焼けを起こしそうだな……

「え？でも何故その様な方と？まさか、白井さんの脳に何か問題でも？」

「……幻想御手の件で相談していましたの（怒）」

初春、サラッと同僚にキツい事を言うな…。黒子が米咬みに青筋を若干立ててるぞ。事実だとしてもストレート過ぎだぞ？

「幻想御手…ですか？」

「ええ。」

「あ、それならあたし……」

「どうしてですか？」

『保護だそうだ。』

「…え？」

「近頃その幻想御手と思われる物で能力（レベル）の上がった能力者達が犯罪

に走る傾向にあるためですわ。」

『まぁ、名目上は保護って事になっているが幻想御手を使って副作用で倒れたり犯罪に走られない為の防止策って事になるがな…。』

黒子や俺の言葉に涙子の動きが凍りついた様に動かなくなる……まさか、涙子のやつ…アレを持っているのか？

「へーー……アレ？どうかしました？佐天さん？」

「えっ！？やっ…別に…あぁっ！？」

幻想御手に関する事で俺や黒子の説明に微妙な反応で返す初春と初春に名前を呼ばれ挙動不審になり手に持ったオーディオプレイヤーを引っ込めるその際に佐天が慌てた為に隣にいる木山の飲んでいたアイスコーヒーに肘をぶつけてしまいぶちまけてしまった。

「わぁー！？す、すみませんッ！！」

「いや、気にする事はないよ。かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば……」

佐天が木山のアイスコーヒーを零してしまったためにアタフタするが、木山は何でも無いように、スカートを降ろしてストッキングを脱ぎだし、その場にいる戒翔以外の人間の顔が真っ赤になる。

「だーかーらー！！人前で脱いでは駄目だと言っていますでしょーが！！！」

「しかし、この起状に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは…」

そんな木山に病院での一件もあり更にヒートアップした語調で耳が劈く勢いで怒鳴っていたが、木山はどこか怒られた子供の様な雰囲気で反論するが……

「趣味嗜好は人それぞれですのよっ！それに殿方だけでなくとも歪んだ情欲を抱く同性もいますのよっ！？」

木山に怒鳴りながらもそう告げる黒子だが悲しいかな…この場にいる木山以外の人間はお前だろと思ってるぞ？

「女の人が公の場でパンツが見える様な事をしちゃ駄目ですっ！……零したのはあたしだけど！」

白熱する黒子とは対照的に違い冷静に涙子は女性としての正論を言う。

「いつも、その公の場で人のスカートを捲る人が言いますかそれ？」

正論を言う佐天の言葉に初春が周りには聞こえない声量でボソリと呟いているが俺には佐天も人の事が言えないんじゃないかと思った。

『（それにしても、あの涙子が何故オーディオプレイヤーを慌ててしまう？まさか…持っているのか？……いや、それ以前に幻想御手の話でオーディオプレイヤーなんだ？まさか幻想御手の正体はオーディオプレイヤーか？しかし、あれは以前から涙子が持ち歩いていた物らしいからその可能性は０だな。）』

しかし、そうなると幻想御手の正体は曲…なのか？しかし耳を通っただけで能力者の能力(レベル)が上がる物な訳がないし専用の機器…学習装置(ント)がなければならない筈……能力開発は五感に働きかける物でなければならないし……どういったカラクリだ？

♪～♪～♪～

「兄貴、兄貴の携帯鳴ってるよ？ところでこの着信音は？」

『黄泉川だな…。』

「誰？」

『教師兼警備員(アンチスキル)で当麻絡みで世話になる事が多い人だ。』

そう言いながら取り敢えず鳴り続ける携帯を取ると通話を押して耳にあてる。

『黄泉川か？』

《戒翔、やっと出たじゃん！》

『どうした、また当麻が何かやらかしたか？』

《そっちじゃないじゃんよ、こっちで捜査した事をお前に教えておこうと思ったじゃん？》

『んな事を普通に話して良い事じゃねぇだろ？』

《学園で同じ仕事をしてるんだから良いじゃん》

『黄泉川がそう言うならそれで良い…か。それで？』

《あぁ、これまでに書庫（バンク）に登録されていて尚且つここ最近で急激に能力（レベル）の上がった連中で戒翔が関わっていない件も合わせて謎の昏睡者は正確な人数はまだだけど少なくとも千人以上となっているじゃん。》

『……それ程までの人が』

《あたしも調べる時に驚いたよ。取り敢えず調べて解ったのは人数とその倒れた原因位じゃんよ。》

『いや、助かったよ。今度お礼に何かするな？』

《なら、あたしのアパートに泊まりに来るじゃん♪》

『仮にも教師だろ、教え子を住まいに呼ぶか？』

《教師の前にあたしは女じゃんよ。》

『はぁ υ今度な…』

《約束じゃん♪》

黄泉川のそんな言葉と共に通話が切れた。

「……それでなんの話でしたの？」

『幻想御手の追加情報だ。』

『俺の知らない奴で常盤大狩りの女や銀行強盗を起こした発火能力者（パイロキネシスト）など、幻想御手を使用したと思われる連中が現在の所で原因不明の昏睡状態だと解った。』

「え…？」

戒翔の言葉に佐天の顔が青ざめる。戒翔はそれに気付いていたが敢えて触らずに黒子に報告した。

「…やはり幻想御手使用よる副作用は謎の昏睡状態になる、という事でよろしいですわね？」

『可能性は大いにあると思う、今の所は事件を起こした連中なんかは意識不明なんだからな。』

俺の言葉に涙子の表情が更に凍り付いて挙動も不審なソレになるって事は……

『……涙子』

「うひゃい！？な、なんですか？戒翔さん」

戒翔に呼ばれた佐天はすぐさま我に返ると少し強張った返事をする。

『お前、持ってるだろ？』

「な、何をですか？」

『幻想御手（レベルアッパー）を』

戒翔の告げた言葉にその場にいた全員の時が止まる。

7月20日　脳医学者（キヤマハルミ）（後書き）

御意見に御感想をお待ちしております。

また、何かアドバイスがあれば御一報下さると助かりますm（＿）m

7月20日　佐天涙子（レベル0）

「……えっと、ほんとなんですか？佐天さん？」

その場の凍ったかの様に錯覚させる雰囲気を壊したのは佐天の親友である初春であった。

「……それは…」

そんな初春の言葉に佐天は顔を下に向け、俯いてしまう。

『俺と黒子に初春が幻想御手の話をしている時、涙子は話に加わろうとしただろ？そのオーディオプレーヤーを出して』

「ほんとですの？」

「え？でも…それじゃあ、幻想御手ってオーディオプレーヤーなの？だけどオーディオプレーヤーだと学習装置（テスタメント）みたいに五感に働きかける事は出来ないと思うけど？」

戒翔が先程の佐天の行動を指摘すると佐天の表情は俯いていて伺えないが肩をビクッと震わせている為にそれを伺わなくとも察しがつく。それに黒子は疑問の声をあげ、美琴は考えながら戒翔に聞いてきた。

『いや、幻想御手（レベルアッパー）の正体は恐らくはその中身…曲だと思う。その中身である曲を聞く事によって五感が刺激され、能力（レベル）が上がる仕組みにでもなっているのだろうな？』

「それって…共感覚性って事なの？」

「寒色暖色。青を見れば冷たく感じ、赤を見れば温かく感じ、風鈴の音を聞けば涼しくなる……あの事ですの？」

『そうた。学習装置はその規模故に個人が持てる代物ではないし、ましてや学生が持てる様な物ではないからな…。だから、この可能性しか有りはしないだろうな…。』

戒翔は美琴の質問に多少の訂正と付け足しをして告げると、美琴は何かを思い出し、ハッとして聞く。

そして、黒子はそんな戒翔の言葉に補足をし、戒翔は肯定し、訳の詳細の説明をする。

『それで、だ。涙子、幻想御手を渡してくれないか？』

「あたしは…ずっと嫌だったんです……」

俺が再び佐天に話を掛けると、涙子は唐突に語り出した。

「あたし、超能力に憧れて学園都市に来たのに、あなたは無能力者です。才能が全くありません…って告げられて、でも憧れは捨てられなくて、それでも毎日、平凡な日々を過ごしてきた」

涙子が語り出したのは自分の事と奥底にある自分の本当の気持ち。

涙子の奴…自分に能力が無いと思い、それがコンプレックスになっていた訳…か。

「そんな時に御坂さんに白井さん、そして御坂さんのお兄さんに出会って、やっぱり自分も能力が使いたいって気持ちがどんどん強くなって、どんなささやかな能力でも良い……例え、低能力（レベル１）の能力でも良いから能力が使いたくて……ううん、皆が頑張ってるのにあたしだけが見てるのが嫌だったから！皆の力になりたかった！ただ…それだけで良かったんです……（ダメ…だよね…。戒翔さん呆れてあたしの事嫌いになっちゃうよね…）」

涙子が話の途中からポロポロと涙をとめどなく流しながらズボンのポケットにあるであろうオーディオプレーヤーを握りしめながら話す。周りを見れば美琴や黒子、そしてあの初春でさえ、唖然とした表情（かお）をしていた。木山は相も変わらず何も感じていない様な無表情であったが……

「戒翔さん。…無能力（レベル０）って、欠陥品…なんで…しょうか…？」

涙子の震える声が俺に聞いてくる。それに対して俺は…

「涙子、もう幻想御手を使ったか？」

「いえ、まだ使ってません。今朝、偶然見つけたので……」

『そっか』

涙子に質問し、涙子の答えを聞いて俺は安堵の微笑を浮かべ

『ふん！』

「あだっ！？」

俺は涙子になのは達の世界で暴走しがちのなのはにやった様なチョップを涙子の頭に軽く入れた。それに対して周りの反応は微妙な物であった。何か悪いか？

『欠陥品？それがどうした！そんな物で自分を卑下してどうする…そんな事を考える暇があるなら自身でどうにかしようとしなない？力ってのは自らの手で掴み取る物だ。誰かに与えられる物でも無いし、何かで手に入る物でだって無い。自らが努力して、それで壁に衝突して足掻き、もがいてがむしゃらになったって良い。そしてまた壁に衝突して足掻いて、抗い続け、踏ん張って…それでも希望を捨てず諦めないで馬鹿みたいに実直なまでに突き進む……その過程で手にした物が本当の自分の力になる。俺だけじゃない、美琴や黒子、それに初春だって努力の果てに今の自分達とその力があるんだ。そうした物が自身の誇れる事にもなる。一人じゃ無理なら涙子には親友の初春。それに通う場所は違うが先輩として美琴がいるし、俺だっている。黒子だっているんだ。躓いたり、挫けたり、諦めそうになった時には人に頼る……それが友達ってものだろ？』

俺はそう言ってからニヤリと笑う。それに釣られる様にして、美琴や黒子、初春も頷きながら微笑む。

『それに涙子は言ったよな？皆の力になりたいって』

「……はい」

『涙子はもうなってるぜ？俺達の力に』

「えっ！？」

『涙子が偶然でも幻想御手を手に入れ、それが今回の事件の解決への糸口になるかも知れない。涙子がそうやって、情報を入手した。、それで俺達は真実の前へと進める。助かった、そして…ありがとう。涙子』

俺は優しく微笑むと涙子の頭にポンッと手を乗せて優しく撫でる。

「か…いと…さん……。…はい！」

佐天は涙を流しながらもその表情を向日葵の様にして笑って頷き、返事をした。

『……さて、と。幻想御手の現物が手に入って情報とかも聞きたい…が、場所を改めるとしようか』

俺の言葉に木山以外の者達が頭に？を出して首を傾げていた。お前等…場所を、周りを見渡してからその頭にある疑問符を出せよなυ

「なんでよ？」

『美琴、俺達はどこに…そして今の時間帯は何時だ？』

「場所はファミレスで、お昼時でしょ？」

『そこまで解っているなら周りを見ろ』

「まわりを……υ」

美琴は自分の席から辺りを見回しながら途轍もない量の冷や汗と共に顔に熱が集まるのを自覚する。それに気付き、黒子も美琴と同じ行動をし、また同じ状態になっていた。

ここは喫茶店。そして、話をしていて殆どが気付かなかったが、今は昼時…学生でなくとも社会人として働く人や店員でごった返している所であり、今の俺達の一部始終をずっと静観して見ていた客達

「さ、さっさとここから出よー！」

「い、異議無しですわ！」

美琴や黒子が羞恥で顔を赤くしながら提案をする。そして、事の本人である涙子に至っては林檎を通り越して茹で蛸すら現界突破したかの様に顔を赤くしていた。

『さて、さっさと出るとするか。ここは俺が払っておくから』

「そうか？わたしが払おうと思っていたのだが」

『元々は俺達の管轄外の件で話を聞いて貰ったんだし、ここは俺が払わせて貰うさ。』

「そうか、ならお言葉に甘えるとするよ。」

木山を除いたメンバーは既に外に出ており、残った俺と木山は勘定の事で少し話をしていた。そして……

「幻想御手ですが現物が木山博士に届くのは明日になりそうですの」

「まぁ、其方にも色々と事情があるんだろうし、手続きの様な物が必要なのだろ？なに、近い内に届くと言うのだ、首を長くして待っているよ。」

そして木山と別れた一行は風紀委員第１７７支部へと向かう。

「あら、お客さん？」

『美偉、お疲れさん。』

「お、お邪魔します」

支部の扉を開けると、美偉が書類整理をしている所であった。

「あ。貴女は確かあの時の。鞄を探してくれて有難うね？」

「あ、いえ…そんな」

「それで？こんな大勢で来てどうしたのかしら？」

『例の件の事に進展があったから、その確認で、涙子はその情報提供者だ。』

俺が美偉に率直にそれだけを言うと表情を何時もの柔らかなものから真剣なものにした

「これでよし。さっ、佐天さん、早速で悪いんですが佐天さんが幻想御手をダウンロードしたサイトを教えてください。」

「う、うん。」

初春が自分のパソコンを起動させながら佐天に幻想御手を発見したサイトを聞く。

そして、初春の周りには美偉も含めたメンバーが集まる。

「Ｍｕｓｉｃ　Ｌｉｎｋ　Ｎｅｗｓってサイトだよ。」

涙子が初春の座る椅子の背もたれに手をかけ、凭れながら言うと、初春はかなり速いタイピングでＭｕｓｉｃ　Ｌｉｎｋ　Ｎｅｗｓと打ち込む。

「これですね」

初春は該当したサイトをクリックするとそのサイトのホームページを開いた

「ん？一見、普通のダウンロードサイトの様ですわね？」

「へぇ〜、ここって、投稿式なんだ」
黒子は訝しげにそのサイトの感想を言うが美琴はホームページのトップにある項目を見てそう呟いた。

「それで、幻想御手って検索するんですか？」
「ううん。Ｍｕｓｉｃ　Ｌｉｎｋ　ＮｅｗｓのＮｅｗｓって文字に隠しページがあるの。」
初春は佐天の指示に従って文字の所をワンクリックする。すると画面が暗転し
ＴＩＴＬＥ：ＬｅｖｅＬ　Ｕｐｐｅｒ
ＡＲＴＩＳＴ：ＵＮＫＮＯＷＮ
と画面に白字でそう表示された。

「アタリ、ですわね」
『涙子、よくこんな場所を見つけたな？お手柄だぞ』
「そ、そんな！見つけれたのはホントに偶然なんで／／／／／／／／」
俺が感心しながら涙子の頭をワシャワシャと撫でると涙子は慌て、

照れながらも笑う。

『……美偉』

「解ってる、警備員（アンチスキル）に連絡するわ。」

「私は業者の人に連絡してサイトを閉鎖させますね？」

「私は木山先生に連絡をしますわ」

『悪いな2人共。少しバタバタするからまた明日に来てくれるか？』

「解ったわ。兄貴も忙しいみたいだしね」

「それじゃあ」

「あぁ、戒翔君？」

幻想御手を見つけ、美琴と涙子を除いた俺達は忙しなく動き、黒子は木山に、初春は関係したサイトの業者に連絡を取り、固法は警備員に連絡をしていた。そこに取り残される形になっていた2人に申し訳ないが今日は帰る様に施すと警備員に連絡をしていた固法に不意に名前を呼ばれた。

『なんだ？』

「もう、日も落ちて遅いから彼女達を送って貰えるかしら？夜道を女の子2人だけだと危ないから」

『ん…まぁ、確かにそれはあるな。解った』

そして、１７７支部から出る。

「今日はありがとうございました！！」

支部を出て少しすると涙子は深々と頭を下げ、お礼を言われた。別段、特別な事はして無い気がするが

「あたし、戒翔さんの言葉がなかったら…もしかしたら幻想御手、使っちゃってたかも知れないですから……」

『なる程、その事か。』

俺が訳解らずにいると涙子が少し陰り…憂いを帯びた笑顔で訳したお蔭で俺は納得した。

『まぁ、美琴にも言ったが、人はどこかで間違いを起こす。だがな？それを恥じたり後悔はするな。誰だって間違いを起こすからな？力を欲したって良い…だが、強請るな、勝ち取れ、さすれば与えられん。誰もが納得する理由や方法を見つけろ…自分で自分の限界を作って諦めんなよ？人の可能性は無限なんだ』

「人の可能性は…無限…」

俺が昔の事を思い出しながらそう言うと涙子は自身の掌を見て、心に刻む様に呟く

『アレ？そういえば美琴は？』

「そういえば、さっきまで一緒だった筈ですよね？」

辺りを2人で見るが美琴の姿はなかったが、アイツの事だから場の空気を読んで先に帰ったか？俺はその後は涙子を家に送り、帰り道にインデックスがいるのと冷蔵庫の貯蔵が切れそうな為にスーパーに寄ってから帰る。

7月20日　佐天涙子（レベル0）（後書き）

御感想や御意見、又はアドバイス等がありましたら御一報下さい。

自分の所の戒翔はフリーですのでコラボなどがありましたらお願いしますm（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3412x/

少年の異世界戦記〜とある魔術の禁書目録と科学と超電磁砲編〜

2011年12月11日20時52分発行